

第5章

ディスカッション活動・ 事後活動セッション



1 ディスカッション活動・事後活動セッションの概要

(1) 目的

ディスカッション活動は、(1) 各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めるとともに、(2) 率直かつ活発な意見交換を通じ、(2-a) 相互理解の促進、(2-b) 集団の中での意見のやり取りをする能力の向上、及び (2-c) 人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

また、ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業後の社会活動）を行う際に必要かつ具体的な知識やスキルを身に付けさせるとともに、参加青年に事後活動への具体的な活動案を考えさせ、積極的な参加を促すことを目的として実施するものである。

事後活動セッションは、各国事後活動組織及びその連携組織であるSSEAYPインターナショナルについての理解を深めさせること、また、自分たちが考えた活動案を事後活動で実現させるために、より具体的な企画・立案を行うことを目的として実施するものである。

(2) テーマ

本年度のディスカッション活動・事後活動セッションにおける共通テーマは「青年の社会活動への参加」とし、その下に八つのグループ・テーマを設けた。参加青年（PY）は、グループ・テーマごとに各国ほぼ同数で構成されるグループに分かれ、意見交換を行った。

a. 共通テーマ 「青年の社会活動への参加」

青年は、リーダーとして社会の活性化と発展に寄与する役割を担っている。各参加国での青年の社会参加の実情を理解し、様々な分野において青年が貢献し得る活動について討議することによって、青年自らが社会参加の重要性を再認識し、PYの事後活動への意欲を高め、積極的な参加を促すことを目指す。

b. グループ・テーマ

- (1) 青年の起業
- (2) 異文化理解促進
- (3) 環境（自然災害と防災）
- (4) 食育
- (5) 保健教育（HIV/AIDS対策）
- (6) 国際関係（日・ASEAN協力）
- (7) 学校教育
- (8) 情報とメディア

(3) 実施方法

a. ディスカッション活動

乗船前に、PYの希望に基づき、所属するディスカッション・グループ（DG）を決定した。所属グループの決

定後には、グループごとに担当ファシリテーターから事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各グループ・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

日本国内活動では、PYは「日本・ASEANユースリーダーズサミット」（YLS）において、日本国内で別途募集した日本人参加者（ローカル・ユース、LY）とともにYLSに参加し、DGごとに、YLS用のディスカッション・テーマに則して、ファシリテーターのアドバイスを受けたコーディネーターの先導で、ディスカッションを行った。また、ディスカッション活動への導入として、ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施した。

乗船後は、導入プログラムにおいて各国の社会活動の事例の発表を行った後、DGごとに、ファシリテーターの指導を受けながらグループ・ディスカッションに参加した。各DGは、ファシリテーターがその運営を統括し、また、各DG及び各国で選出されたディスカッション活動運営委員がファシリテーターを補佐した。

フィリピンの訪問国活動では、グループ・ディスカッションの議論をより充実させるため、グループ・テーマに関連した課題別視察が設定された。PYは、課題別視察先において、活動を具体的に体験し訪問先の人々と交流する場を持つことにより、その分野における「青年の社会活動への参加」についての認識を深めた。

DGごとに5回のセッションを行った後、PYが事業後に社会貢献活動を行う際に必要な具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取組方をファシリテーターから学ぶセッションを行った。その後、DG別にファシリテーターとディスカッション活動運営委員が進行役となり、ワークショップ形式により、具体的かつ実践的な企画・立案の演習を行った。

各DGは、成果発表会において討議内容の成果発表を行うとともに、ディスカッション・レポートを作成した。

b. 事後活動セッション

ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業後の社会活動）に関する企画・立案を行うとともに、PYの事後活動への意欲を高め、積極的な参加を促すことを目的として事後活動セッションI～IVを実施した。

事後活動セッションIでは、各国事後活動組織代表者が全体会を実施し、各国事後活動組織の連携組織であるSSEAYPインターナショナルについて紹介するとともに、その目的・活動状況についての理解を深め、PYの

SSEAYPインターナショナルや各国事後活動組織の活動への積極的な参加を促した。併せて、過去の参加青年がプログラム中に発案したプロジェクトの、その後の実施状況・成果を紹介し、PYがより具体的に事後活動をイメージできるようにした。

事後活動セッションIIでは、国別に各国事後活動組織代表者とディスカッション活動運営委員が進行役となり、各国における事後活動組織や過去の参加青年による活動状況や事例について理解を深めた。（ミャンマーに

ついては、NLとディスカッション活動運営委員を中心に行った。）

事後活動セッションIIIでは、国別にPYが事後活動として各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについて議論し、各国事後活動組織代表者のアドバイスを受けながらプロジェクト案の作成に取り掛かった。

事後活動セッションIVでは、国別に事後活動セッションIIIで出てきたプロジェクト案を更に具体化し、完成させ、また、帰国報告会に向けた発表の準備を行った。

(4) ディスカッション ファシリテーター

ディスカッション・グループ	氏名	国名	性別
青年の起業	Polkrit Thomya	タイ	男
異文化理解促進	Wiwit Prasetyono Hidayat	インドネシア	男
環境(自然災害と防災)	Eudela, Ma. Lourdes Rosquillo	フィリピン	女
食育	Saengnapha Uthaisaengphaisan	タイ	女
保健教育(HIV/AIDS対策)	上田 めぐみ	日本	女
国際関係(日・ASEAN協力)	Aldecoa, Tito III Leduna	フィリピン	男
学校教育	Low Chai Siong Anthony	シンガポール	男
情報とメディア	Devianti Febriani Faridz	インドネシア	女

(5) 各国事後活動組織代表者

国名	氏名(事業参加年)	性別
日本	酒井 晶子(2009)	女
フィリピン	Alerta, Ma. Louraine Taperla(2012)	女
ベトナム	Hoang Minh Thong(2012)	男
ラオス	Silisack Malavong(2009)	男
マレーシア	Saridah Binti Mohd Sahid(2008)	女
ブルネイ	Dk Maswati Binti Pg Tajuddin(1995)	女
カンボジア	Chhuong Yiv Chhoy(2013)	男
インドネシア	Icu Surtini Marwati(2012)	女
シンガポール	Yew Zhengchang(2008)	男
タイ	Pakin Santanan(2009)	男



各国事後活動組織代表者が安田貴彦内閣府青年国際交流担当室長を表敬訪問する(12月16日)

【プログラムの流れ】

乗船前		PYの希望に基づき、所属グループを決定 PYは各国にて事前課題等の準備
↓		
日本国内活動	11月1日～11月3日 11月4日	日本・ASEANユースリーダーズサミット グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
↓		
船内 ディスカッション 活動	11月6日 11:30-12:45	グループ別ミーティング (ディスカッション活動運営委員の選出)
	14:15-17:00	第1回ディスカッション活動運営委員会 (ディスカッション活動の運営方法の協議、導入プログラムの準備)
	11月7日 11:30-12:45	第2回ディスカッション活動運営委員会 (ディスカッション活動の運営方法の協議、導入プログラムの準備)
	11月8日 14:15-17:00	導入プログラム (ディスカッション活動の主旨・実施方法等の説明、 共通テーマに基づいた各国の社会活動事例発表)
	11月9日 10:00-12:45	グループ・ディスカッション
	11月10日 10:00-12:45	グループ・ディスカッション
↓		
フィリピン 訪問国活動	11月12日	グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
↓		
船内 ディスカッション 活動	11月15日 14:15-17:00	グループ・ディスカッション
	11月16日 14:15-17:00	グループ・ディスカッション
	11月23日 10:00-12:45	グループ・ディスカッション
	11月24日 10:00-12:45	事後活動の企画・実践に向けての導入
	11月25日 10:00-12:45	事後活動の企画・実践に向けたワークショップ
	12月1日 10:00-12:45	まとめ
	12月2日 10:00-12:45	成果発表会の準備・DG毎のレポート作成
	12月3日 10:00-17:00	成果発表会
	12月4日 10:00-12:45	自己評価
↓		
船内 事後活動 セッション	12月10日 14:15-17:00	I(全体会) (SSEAYPインターナショナル及び各国事後活動組織の活動事例紹介)
	12月11日 10:00-12:45	(国別) (事後活動組織と既参加青年による活動の紹介)
	12月12日 10:00-12:45	(国別) (各国で取り組んでみたいことや プロジェクトについての議論及びプロジェクト案の作成)
	12月13日 10:00-12:45	(国別) (プロジェクト案の完成、帰国報告会での発表準備)
	12月15日 16:00-17:30	帰国報告会 (国別にプロジェクト案の発表)

2 ディスカッション活動・各グループのレポート

(1) 青年の起業グループ

ファシリテーター: Mr. Polkrit Thomya

PY: 40名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

日本とASEAN各国における社会と起業（ビジネス）の関係や現状を理解し、その上で、社会及び経済を活性化する点から、社会としてどのような取組が必要か、また、青年自身もどのように取り組むことができるかについて議論し、発表する。

（日本とASEAN各国における社会及び経済の活性化には、青年による起業が大きく貢献できると考えられる。しかしながら、社会的、文化的、経済的な面において、青年が起業しやすい環境が常に整っているわけではない。そこで、青年の斬新なアイデアや行動力を活かす社会づくりについて青年自身が考えることが重要である。）

目的

- 東南アジアと日本における起業の成功例・失敗例と、それらが様々な点で該当地域や国の生活レベルの向上にどのような影響を与えたかを学び、共有することで参加青年（PY）に刺激を与える。
- 各国PYは、「東南アジア青年の船」事業参加後に自国や地元で行う、青年の起業を促進するプロジェクトに関するしっかりとした行動計画と予定表を作成する。

ゴール

- 青年の起業の重要性と社会への影響を理解する。
- 東南アジアと日本における青年の起業の現状を理解する。
- 起業に関係するあらゆる立場とその役割を理解し、青年の起業を推進するよう関係者を促し、協力する方法を学ぶ。
- 青年の起業を推進する決意を固め、興味を深める。
- 東南アジアと日本で青年の起業を促進し、ネットワークを構築するための活動や行動計画を作成する。

B. 事前課題

個人課題

PYは自国における青年の起業について調べ、2つの事例（成功例1件、失敗例1件）を選んで議論に備えてA4用紙1枚に情報をまとめる。その際、以下の点を含めること。

成功例

- どのような事業か
- なぜ成功したか
- 事業が成功に至る過程で、関係者はどのような支援を行ったか

失敗例

- どのような事業か
- なぜ失敗したか
- 事業を成功させるために、関係者はどのような行動を取るべきだったか

国別課題

国ごとに、自国における青年の起業の現状を以下の各テーマに沿って調べて、パワーポイントのスライド5枚、7分間のプレゼンテーションを準備すること。

- 教育機関はどのように青年の起業を支援・奨励しているか
- 政府や地方自治体はどのように青年の起業や新規事業を支援・奨励しているか
- 民間組織はどのように青年の起業や新規事業を支援・奨励しているか
- 消費者はどのように青年の起業や新規事業を支援しているか
- 青年の起業や新規事業の現状と成長はどのような状態か。成長を促している主な要因は何か

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：株式会社a.school

「東南アジア青年の船」事業の既参加青年によって創立されたa.schoolは、小学生から中学生に向けたオルタナティブ教育の創造を目的としている。

活動

まずa.school代表岩田拓真氏から「子どもに創造性を」をコンセプトに創立した同校についての紹介があった。続いて、日本の教育システムは時として子どもの創造性を制限する可能性があるとする講義があった。a.schoolでは創造性と探究心を基にした学びを奨励しており、子どもたち自身がカリキュラムを再設計する機会までも与えられている。

講義の後、PYは代表と共に簡単なワークショップを行い、誰も答えを持っていない質問の「壮大な『なぜ』

を発見する」というテーマでブレインストーミングを行った。PYが同意の上、議論のために選んだ問いは「なぜ日本人は大浴場が大好きなのか」である。DG内の日本参加青年が質問に答える手助けをした。この活動により、PYの創造的思考が促された。

視察から学んだこと

PYは以下の知識を得た。

- 代表の「社長になるだけでなく、社会を変える人間になりたい」という言葉と、情熱。さらに、青年の起業は実際に社会へ違いをもたらすことが可能であること。
- a.school創立期の政府による財政支援と、青年の起業を奨励するには創立期の援助が重要な要因である点。
- a.schoolでは創造性、ユニークさ、教え方のオープンさを通じて変化を生み出すことが可能となっており、日本の慣習的な教育システムの枠を超えていること。

グループ・ディスカッションI: なぜ青年の起業なのか? ねらい

青年の起業による社会全体への影響を理解する。

活動

- a. 起業についてのビデオ - 社会への影響
PYは3本のビデオを鑑賞した。
 - (1) Googleはインド・パキスタン戦争中に離れ離れになってしまった友人たちの再会を可能にした。
 - (2) Airbnbは見知らぬ人同士を友達にした - ベルリンの壁の東側と西側の警備員の物語
 - (3) TEDxのNong Khao Man Gaiによるスピーチ - 起業精神の意味について語る、米国オレゴン州の女性起業家の物語
- b. 個人目標の設定
PYはディスカッション活動の終わりまでに達成したいことを付箋に記入し、ホワイトボードに貼って他のメンバーと共有した。
- c. 起業家が解決した課題の例
マレーシア、タイ、インドネシアの起業家集団が設立し、東南アジアの多くの国で輸送問題の解決に寄与したGrabTaxiの例をファシリテーターから紹介した。
- d. グループ・ディスカッション - 青年の起業が解決に貢献できる社会課題は何か。
PYは少なくとも4つの参加国出身の青年6~7人からなる6つのグループに分かれ、青年の起業が解決に貢献できる社会課題は何かについて議論した。
- e. グループ・プレゼンテーション
PYはロールプレイ形式でアイデアを発表した。各グループには7分間のプレゼンテーションと、3分間の

の質疑応答の時間が与えられた。

成果

PYは、社会に変化を生み出すためには必ずしも政治家や市民社会のリーダーとなったり画期的なアイデアを提案したりする必要はなく、小さな一歩から始めることが大きな違いをもたらすことを明確に理解した。その証として、PYは次の様な言葉を考えた。「青年はビジネス上のリーダーシップや起業を通じて国を成長させる、大きな可能性を持っている。青年の新鮮で革新的なアイデアは差し迫った課題への解決策を見出すことができ、無限の機会を創造することができる。」

ビデオ鑑賞と事例紹介から、起業家には地域社会を團結させ、プロジェクトに政府や民間組織などの重要な団体を巻き込み、財政的な安定のみならず一体感や相互理解をもたらす力があることをPYは理解した。

セッションの最後に、PYはイノベーションとお金や金融に関する知識を活用し、地域社会に貢献するプロジェクトを率先して行うことに同意した。また、青年起業家は社会の基盤であることから、青年が地域の経済的、社会的な成長に向けて目的意識と責任感を持つよう促すことにも同意した。

グループ・ディスカッション II: 各国における青年の起業の現状

ねらい

日本とASEAN各国における青年の起業に関する現状を理解する。

活動

- a. グループ・ディスカッション
PYは参加国ごとに11のグループに分かれて事前課題の見直しを行い、パワーポイントを使用したプレゼンテーションを準備した。内容は、教育機関、政府、民間セクター、消費者からの起業支援と最近の成長状況を含んだ、各国の起業の現状についてである。
- b. 国別課題のプレゼンテーション
PYは参加国のアルファベット順に課題を発表した。各参加国には7分間のプレゼンテーションと3分間の質疑応答の時間が与えられた。

成果

PYは東南アジア各国と日本における青年の起業の現状と、青年の起業には各セクターが以下に列記する重要な役割を担っていることを学んだ。

- a. 教育機関 - 東南アジアと日本における起業に関する教育を行う学校・大学数の増加は起業家数の上昇につながる。
- b. 政府・地方自治体 - シンガポールや日本のような国における財政支援は、その国の青年が起業する後押しとなっている。支援には税額控除、新規事業への

資金提供や登記プロセスの簡素化が含まれる。

- c. 民間組織 - 東南アジアと日本における民間組織による支援は、奨学金や資金の供与から場所の貸し出し、ワークショップ、パートナーシップの機会の提供まで多様である。
- d. 消費者 - フィリピンなどの数か国では、クラウドファンディングや見込顧客からの資金提供、青年起業家が作り出した地元の製品やサービスの購入が支援となっている。

PYは、地域における最近の青年の起業を牽引する要素は以下であることを理解した。

- a. オンラインビジネスの勃興
- b. 東南アジアと日本におけるIT、食品、農業分野などでの青年起業家の数の増加
- c. 起業に関する講座の数の増加
- d. 新規事業立ち上げプロセスの簡素化
- e. コミュニケーション技術の進歩

フィリピンでの課題別視察

施設：Trese Payatas

Trese Payatasは、地域に収入をもたらすために独自の製品を生産する団体で、ケソン市にてGawad Kalinga (GK) の元で運営されている。同団体は非就学の青年への訓練と雇用を実施している。

活動

セッションは団体リーダーからの歓迎の言葉と感動的なスピーチで始まり、PYはこの起業プロジェクトが地域の自立と安定を目的として実行された点、そのため製品の生産には地元社会の人々が参加している点を学んだ。

その後PYは二手に分かれ、2つの場所を順番に視察した。Tシャツのシルクスクリーン印刷とバッグ縫製の現場である。バッグには「GK」もしくは「Gawad Kalinga」というロゴが印刷されており、これは「人々を気にかける」という意味である。PYは、自身でGKのロゴをTシャツに印刷する機会を得た。

さらに、PYはさらに地域の幼稚園を訪問し、地元の学生との交流を行った。

視察から学んだこと

PYは以下の各点について学んだ。

- 青年の起業は地方の生活水準の向上に役立つ
- 青年が地域に対してビジョンを持つことは非常に重要である
- 「課題」を「機会」として考え物事を積極的にとらえれば、取組の効果が拡大する。
- 地域の人々が共に成長し、発展するためには他者への気遣いが重要である
- 強固な中間層コミュニティの形成が経済には極めて

て重要である

- 自分のしていることへの情熱を持つことが成功につながる
- 起業家は小さく事を始め、大きな夢を持ち、自信を持って、自ら行動を起こす

グループ・ディスカッション III：社会は青年の起業をどのように支援できるか

ねらい

青年の起業を促進する上で重要な役割や影響を持つ関係者と、それぞれが提唱する取組を理解する。

活動

- a. フィリピンでの課題別視察の振り返り
PYはマニラのTrese Payatasを視察しての感想やフィードバックを共有した。2名のディスカッション活動運営委員が書記を務め、情報をまとめた。
- b. 起業環境の紹介
ファシリテーターから、青年の起業に係る利害関係者や、それぞれが青年の起業の推進をどのように支援できるかの例を紹介した。
- c. グループ・ディスカッション
社会において青年の起業を後押しをするカギとなる関係者や取組は何か。最低4か国のPY6~7人からなる6つのグループに分かれて議論した。
- d. グループ発表
PYは模造紙やパワーポイントを用いてアイデアを発表した。各グループには7分間の発表と、3分間の質疑応答の時間が与えられた。

成果

PYは青年の起業を促進する5つの主な関係者とそれぞれの取組について学んだ。

- a. 教育機関：起業に関する授業やワークショップの増加。これは、成功を収めている地元の若手起業家を招待し、自らの経験を共有してもらうことで実行できる。
- b. 政府やNGO：青年の起業を支援する政策の立案。助成金や経済的支援の供与。地元の製品へのアウトリーチ活動。
- c. 民間組織：青年の起業に関するCSRプロジェクトの実行。青年が実際に起業家となる体験ができるターンシッププログラムの作成。青年の起業に対する意識を高めるコンテストの開催。
- d. 消費者・地元社会：地元製品の支援。ソーシャルメディアや口コミによる地元製品の宣伝。製品に対する推薦、フィードバック、批評を通じた事業拡大の支援。
- e. メディア：地元の製品についてニュースを掲載し、製品について市場を啓蒙する。

グループ・ディスカッション IV：地元の起業家の成功例と失敗例

ねらい

東南アジアと日本における実際の成功と失敗の主な事例を理解する。

活動

a. 起業の成功例に関するビデオ GrabTaxi

ファシリテーターは、東南アジア5カ国に事業を拡大したGrabTaxiの成功例を共有した。この事業は、東南アジアの多くの大都市におけるタクシーサービスの信頼性、効果性、安全性という輸送問題を解決するアイデアとして生まれた。消費者側の問題解決に寄与するだけでなく、雇用創出と地元のタクシー運転手の収入増加も促進している。

b. グループ・ディスカッション

PYは20の二人組に分かれ、個人課題を見直してパワーポイント形式のプレゼンテーションを準備した。各組は自国の起業事例から成功例、失敗例をひとつずつ選び、それぞれの事業を成功・失敗に導いた要因を特定した。

c. 個人課題の発表

二人組で2つの例をパワーポイント形式で発表した。各組の発表の持ち時間は5分で、5組のプレゼンテーションが終わるごとに5分間の質疑応答を行った。

成果

PYは40の事業に関する物語（20の成功例、20の失敗例）を共有し、東南アジアと日本の事業には共通の成功要因、失敗要因があることに気付いた。その例には以下の点が含まれる。

a. 成功要因：タイミングの良さ、市場を破壊するようなアイデア、リーダーシップ、顧客ニーズへの呼応、技術の活用、ネットワーク、政府による支援
PYはJollibee（フィリピン）、Toh-Lao（ラオス）、Sing Youth Hub（シンガポール）、Fresh Me（タイ）等、成功を収めた事業の例を共有した。

b. 失敗要因：顧客ニーズに応えられない、財務の管理ミス、人的リソースの欠如、複雑すぎるビジネスプラン

PYはKoncept Living Mart（ミャンマー）、NOVA（日本）、Amble Footwear（インドネシア）、2500R Retail Stores（カンボジア）等、失敗に終わった事業の例を共有した。

PYは自分の国でも応用や実行可能な、他国における新しいビジネスアイデアについて、多くの知識を得た。また、東南アジアと日本の文化的多様性について学び、それらのビジネスがターゲットとしている市場で成功を収めるために、いかに異なる文化に適応が可能だったかを学んだ。1回のセッションで網羅するには多すぎ

る程の物語の数だったが、同セッションが優れた共有の場であり、役立つ情報が得られた旨、PYは同意した。

グループ・ディスカッション V：「東南アジア青年の船」事業後、個人としてどのようにして青年の起業を推進していくか

ねらい

「東南アジア青年の船」事業後に自国で実施する活動のしっかりとした行動計画を作成する

活動

a. これまでのテーマの要約

セッションIからIVまでに学んだテーマをファシリテーターが要約した。

b. グループ・ディスカッション

PYは国ごとに11のグループに分かれ、これまでの4回のセッションで学んだ情報を組み合わせて、「東南アジア青年の船」事業後に青年の起業を推進するために自国で行うプロジェクトのしっかりした行動計画を作成するためのアイデアをまとめた。テーマには以下の点が含まれる。

- 起業を促進するためのプロジェクト案は何か、なぜその案を選んだか
- 自国でその案をどのように実行するか
- 自国政府・地域をどのように巻き込むか
- その案は地域を改善する上でどのように役立つか
- 想定される課題と解決策は何か
- 行動計画の詳細と予定表

c. グループ発表

各グループ（参加国）には7分間の発表と3分間の質疑応答の時間が与えられた。各国ともパワーポイントを使用して計画を発表した。

成果

短時間だったにも関わらず、PYは「東南アジア青年の船」事業後に各参加国で実施する活動について多くの秀逸なアイデアを出し、確固とした行動計画を作成した。

ブルネイ Youth Entrepreneurs Charity Bazaar（青年起業家チャリティバザー）

地元の青年を集め、お互いに強固なつながりを持つ起業家のネットワークを構築することを目的とする。

カンボジア #DREAM_BIG（夢は大きく）

カンボジア青年の中に宿った内なる起業精神に火を付けることを目的としてワークショップを行い、パネルディスカッションを通して成功している起業家と新規事業を始めたばかりの青年起業家をつなげる。

インドネシア The Youngsters（若者たち）

専門家との出会い、自らの起業アイデアの計画、プロジェクト実行などの機会を与えることで若者の間に青年の起業を広める。

日本 CEO Stay (社長ステイ)

47都道府県で社長の自宅に滞在するプログラムを実施し、学生、社長、地域社会の強いつながりを構築する。

ラオス Handicraft House Training (手工芸訓練)

地元の人々が工芸品の製作などの小規模事業に携わることで、世帯により多くの収入をもたらす、地域の雇用率を増加させることを目的とする。

マレーシア KUDESA Accelerator Programme

青年の起業スキル向上と、クランタン州の農村地域における経済の改善を目指す。

ミャンマー Beads of Dreams (夢ビーズ)

地域の子ども達に手工芸のスキルを教え、自立できるよう支援する。

フィリピン PWDs (障害を持つ人々)

障害を持つ人々のやる気を高め、障がいのある人々も能力と創造力を発揮できるインクルーシブな社会の促進を目的とする。

シンガポール Share Your Experiences (経験を共有しよう)

青年が起業家となり、事業を運営する上での自主性と責任感を持つための機会を活用する。

タイ The Attitude Project (意識プロジェクト)

タイの既参加青年との共有セッションを通して地域での青年の起業を促す。

ベトナム The 100,000 VND project (10万ドンプロジェクト)

10万ドンを効率的に使用するアイデアを考えさせることで、青年に枠を超えた発想をさせ、刺激を与える。

すべての参加国におけるプロジェクトはチーム編成、SMARTの法則に基づいた目標、予定表、KPIなどを含んだしっかりとした計画が作成された。全プロジェクトが青年の起業を促し、自国の地域社会をより住みよい場所とするという共通の目的を待っている。

D. 決意・期待される今後の活動

このDGのPYは、国ごとに「東南アジア青年の船」事業後に自国において実行する事後活動のしっかりと

した計画を準備した。ファシリテーターの推奨に応じて、チーム編成、SMARTの法則に基づいた目標、ガントチャート、重要業績評価指標 (KPI) などを含むプロジェクト・マネジメントの枠組みを応用した。11のプロジェクトの詳細については、別添の書面に記載する。

さらに、DGとして行う事後活動として、「SSEAYPreneurs」というFacebook上のオンラインネットワークをすでに立ち上げており、情報交換と、11か国で行われる事後活動についての状況を更新する場として使用する。

これらの情報はナショナルリーダー (NL)、各国事後活動組織代表者 (OBSC)、各国の事後活動組織にも伝え、それぞれの組織でPYのアイデアを聞き、アドバイスを加え、設定した時間軸に応じてプロジェクトの監督・評価を支援する。また、2016年にカンボジアで行われるSSEAYPインターナショナル総会にて各参加国のプロジェクトの最新の状況を発表する。

E. 評価・反省 (自己評価セッション)

ほとんどのPYの個別目標は達成された。達成点には以下が含まれる。

- 日本とASEAN各国のPY間のつながりの構築
- 社会で起業を促す方法を知る。
- 主な関係者とそれぞれの起業への支援方法など、起業の環境について学ぶ。
- プレゼンテーション技能の向上
- DGの仲間と学び合い、アイデアと経験を共有する
- よりクリエイティブであることを学ぶ。
- 事業の立ち上げ方に関する深い知識
- 正式なビジネスプランの書き方

未達成の目標に関しては、「東南アジア青年の船」事業後のオンラインネットワーク「SSEAYPreneurs」上での情報共有を通じて達成を目指すよう、ファシリテーターの助言があった。起業に関するワークショップ、会議、コンテストに誘い合う、新規事業の共同パートナーを探す、各国での事業立ち上げのノウハウを共有する、成功を収めた起業家の物語を共有して刺激し合う、等の活動を通してお互いにつながり続けるための計画が、すでにPYによりなされている。

以下の点を含んだ、PYは予想以上の学びも得ることができた。

- 地域社会を事業に巻き込むと、その事業がより規模はより大きく、持続可能なものとなるという学び
- 事業はただ金銭的な目的で行うのではなく、地域社会の生活水準向上に役立てることができる。
- プロジェクトの計画には時間がかかり、実行前に評価が必要である
- タスクが複数ある場合は、緊急性と重要性のレベルに応じて優先順位をつけなければならない。チーム

のメンバーの同意は必須である。

- DG1の仲間達のさまざまな職業上・教育上の背景を知る。

F. ファシリテーター所感

ファシリテーターとしての経験

事業全体は以下の点を含め、非常にうまく企画・構成されていた。

- ファシリテーターの選考プロセス
- 8月に東京で行われた事ファシリテーター会議
- 日本での国内プログラム中の「日本・ASEANユースリーダーズサミット」
- 各ディスカッション・セッション前にPYに知らされた船内活動のスケジュール

課題別視察

日本

- 課題別視察の前の2時間を使ってグループにファシリテーターの自己紹介と経歴の説明を行い、また40人のPYも自己紹介をし、DG1を選んだ理由を全体に発表した。DG内の仲間と初めて知り合うだけでなく、お互いから刺激を受ける機会となり、生産的なセッションであった。
- 日本での課題別視察先（a.school）では既参加青年が代表を務めており、PYが親近感を持つことができる良い選択であった。また、代表はこれまでとは異なる事業を行っており、知識そのものよりも独創性と想像力が重要であることをPYに気付かせてくれた。

フィリピン

- Trese Payatasでは貧困ライン以下にある地元の人々が起業を通じて実際に地域の生活水準を向上させており、良い選択であった。地域のリーダーは善良な方々で、社会貢献に関するスピーチがPYに刺激を与えた。
- 地域の人々はPYを暖かく歓迎し、昼食を共に取るなど、視察全体を通じてPYとの交流を図ってくれた。
- 唯一の懸念は、地域の訪問場所のひとつひとつが狭く、40人のPYが2つのグループに分かれたのにも関わらず、視察先に各グループが収まりきらなかったことである。もし次年度以降に類似のケースがあった場合、DGを3~4グループに分け、PYがより緊密かつ効果的に各セッションを経験できる機会を作るとよいだろう。

ディスカッション・セッション

- グループ別ミーティング

課題別視察の振り返りをすでに日本滞在中にしてあったため、このセッションでは次回のセッション以降のために時間を使うことができた。PYには、ファシリテ

ーターの役割は講義することではなく議論を促すことだと説明し、ディスカッション活動の中心は彼らだと説明した。この点に関しては明確な理解が見られた。DG1のPYは自ら進んで行動するべきだと伝えただけで、ディスカッション活動運営委員に立候補する者が多く出た。

- グループ・ディスカッションI、II

Google、Airbnb、TEDxのインパクトの強い物語に高い関心が示された。PYには、ディスカッション活動を通じて心を開き、積極的に傾聴を行う事を推奨した。個人目標はホワイトボードで共有した。多くの青年は自身も起業家になりたいと考えていたため、DG1のゴールが自国の社会における青年の起業を促進することである点を再び強調し、PYの理解を得た。セッションIIではPYが自国における起業の現状を共有し、すべての青年が素晴らしい学びであったと声を揃えた。東南アジアと日本からの最新情報が一堂に集約される場合は、未だ他に類を見ないためである。

- グループ・ディスカッションIII、IV

セッションIIIはセッションIIからの素晴らしい流れで、PYは起業環境に存在する主な関係者について学び、自分達が発表した国別課題まで遡って考えることができた。さらにセッションIVでの個人課題の発表は、多くの質問が出る活発な場となった。

- セッションV

同セッションはしっかりとした事業活動の計画を作成するために行った。各国は計画案を作り、全体に発表した。DGの仲間からのフィードバックが役立ち、PYは寄せられたアイデアを計画を調整する上での参考とした。

プロジェクト・マネージメント・ワークショップ

- ワークショップの準備では、全ファシリテーターがプロジェクト・マネージメントについての自らの知識を見直す機会となり、PYだけでなくファシリテーターにとっても役に立つものであった。というのも、何人かのファシリテーターは自国の事後活動組織で活動しており、現在及び将来的なプロジェクトにプロジェクト・マネージメントの枠組みを応用することができるからである。
- 実際のワークショップは、計画した時間軸に沿って行った。PYにとって理解しやすくするため、あらかじめ内容を要約しておいた。数人のPYから、図を使用したまとめの部分が枠組みを覚える上で有益であったとのフィードバックがあった。PYが居眠りをしないよう、また活発に参加できるように、適切なタイミングでアクティビティを実施した。

- ワークショップの後、DG1のPYは書類（ハンドブック）を大切に保管し、質問をするために次のセッションに持ってきていることに気付いた。DG1はDG3と協力し、実りのある質疑応答を2時間かけて行った。PYが積極的にプロジェクト・マネジメントの枠組みを学び、それを自国で実際に使ってみようということを変に嬉しく思った。

プレゼンテーション

- PYは2名のディスカッション活動運営委員の助けを借りて12月1日と2日にプレゼンテーションの準備を進めた。PYは5つのグループに分かれてそれぞれのセッションの成果をまとめ、12月3日の最終プレゼンテーションに向けて素晴らしいビジュアル資料を準備した。また、プレゼンテーションの日には全体に対してDG1としてのコミットメントを示すことができるよう、全参加国がしっかりと事後活動の計画を完成させておく必要があることを強調した。
- この時点ですべての参加国からのしっかりと事後活動の計画が必要な訳ではなかったが、1999年か



ら2009年にタイ王国の事後活動組織の運営委員を務めた身としては、ディスカッション活動の終わりまでに計画を完了させてPYのコミットメントを促した方がより一層好ましいと考える。計画が大ざっぱすぎたり青写真程度であったりすると、実行には至らない可能性があるからだ。この点については過去の学びがある。最終的には、すべての参加国が最終プレゼンテーションの前に計画を提出し、全体に発表したの嬉しく思った。

- DG1は12月3日の最終プレゼンテーションの前日、12月2日に通しのリハーサルを行った。PYにとっては内容を調整し、練習をする機会となった。2名のディスカッション活動運営委員が発表の各パートに適切な発表者として委員以外の5人を発表者を選び、うまく調整を行った。彼らの熱意とチームワークには感銘を受けた。起業家精神と良いチームワークを如実に反映していた。最終プレゼンテーションはグループの想像を超えるものであり、DG1のメンバー全員で喜んだ。



(2) 異文化理解促進グループ

ファシリテーター： Mr. Wiwit Prasetyono Hidayat

PY： 42名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

多文化共生社会を築き上げることを目指して、特に家族関係や社会文化習慣など身近なトピックを取り上げ、異文化理解を促進するために青年ができることについて議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

ディスカッション活動は、東南アジアと日本における文化の多様性について、PYがより深い気付きを得る機会とする。この地域の人々の交流が急速に増加していることを踏まえ、様々な話題やアクティビティから、異文化理解の重要性についてのディスカッションへとつなげる加えて、将来のリーダーとなりうるPYが、異文化理

解を促進するための活動を小さなものから始めて、ゆくゆくは大きなグループを対象としたものまで自分自身で作り出すことができるようにする。

ゴール

- PYは、異文化理解に関する基礎的な事項やコンセプトを理解する。
- PYは、東南アジアと日本において人々またグループ間の社会的なやり取りに影響を与える要素を明確に認識する。
- 異文化理解に関する課題解決に向けて、PY自身で活動を企画できるようになる。
- PYは、事後活動を通してさらに広い範囲の人たちに異文化理解を広めていけるような自信を身に付ける。

B. 事前課題

個人課題1：人生の節目の祭事への参加

人生の節目に行われる家族内や地域の祭事に参加している写真又は何らかの紙媒体を持参する。

個人課題2: エッセイ

自国における移民の現状について、500語以内のエッセイを書く。この課題は、異なる文化的背景を持つ人々の交流を進めるための取組みのうち、各国で成功していることについてディスカッションするために使用する。

国別課題1: “Pecha Kucha” プレゼンテーション

国ごとに20枚のパワーポイントを準備し、1枚20秒で自動的に次のスライドに移る形式にそろえた。発表の内容は、それぞれの国で人生の節目に行われる祭事についてである。短めで視覚に訴えるこのような発表方法を採用することで、聞き手がさらに集中するようになると同時に、発表の後のディスカッションの時間を長く確保することができる。各国の文化の独自性を理解する良い機会とただだけでなく、PYは東南アジア諸国や日本における誕生から死までの伝統的な儀式についての、類似点を考える。

国別課題2: 各国における文化的なしきたり（すべきことと禁止事項）

国ごとに、地域での生活における事柄、宗教施設訪問時の決まりごと、ビジネスマナーなど、少なくとも3つの場面でのすべきこと、してはいけないことをリストにする。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：裏千家

活動

裏千家訪問の前に、PYは茶道に関する小冊子を受け取った。裏千家東京道場では、伝統的な作法にのっとりPY一人一人にお茶とお菓子が出された。2人のPYは、自分たちでお茶をたてる機会も得た。最後に、亭主を囲んでの質疑応答の場が持たれた。

視察から学んだこと

- 裏千家茶道は、重要な文化であり日本人にとっての一つの美の形であるが、そればかりでなく、その土台には非常に深遠な意味と心がある。最も重要な意味は、心身の浄化である。茶室に入る前に、客は庭を歩き木々などの美をめぐることになる。そして、庭の端には手と口を清める場が用意されている。
- 戦時中には、茶室はたったひと時であれ心を落ち着かせることのできる唯一の場所であった。このことは、実は現代にも引き継がれている。静寂さと心穏やかな場は、そこにいる者の内省を助け、心の平安

を見つけることができる。

- 日本の茶道は、現代にも引き継がれている伝統の良い例であり、大都市でも、そして近代化とグローバル化の波を受けながらも実践され続けている。PYは、この例を見て、それぞれの国に帰った後には、それぞれの文化を広め、保護することにもっと積極的に関わろうと思うようになった。

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 各自の目標及び全員で守るグループ・ディスカッションに向けてのルールを設定する。
- 各国の現状を明らかにし、多文化共生社会について話し合う。
- 異文化理解の重要性を確かめる。

活動

- 各自の目標とグループ・ディスカッションのルールを設定する：PYは各自で、付箋に「期待」と「抱える課題」を書き出した。その後、それぞれの付箋を「期待の木」「課題の木」と名付けた大きな紙に張り付けた。数人のPYが、ほかのPYの期待や課題のいくつかを読み上げた。このセッションの終わりには、ディスカッション活動が最高の成果を生み出すことを目指して皆で守るべきルールについて話し合った。
- 小グループ・ディスカッション：8つのグループに分かれて、各国で、文化的背景の違う人々の相互交流があるのか、多文化共生社会の重要性についてなど、いくつかのテーマについて話し合った。
- 「新しい文化」ゲーム：このゲームの目的は、自分たちの習慣とは違う習慣を持つコミュニティとの相互交流を体験してみること。PYは、2グループに分かれ、それぞれに複数の異なる役割が与えられた。

成果

- PYは、各自の期待を発表したり、目標達成の妨げとなる課題を分析することで、それぞれの目標を設定することができた。
- グループ全体の基本的なルールを設定し、ディスカッション活動中は、それを全員が守るということと同意した。
- 東南アジアの国々には、様々な少数民族が暮らしているが、日本にはいない。昨今、移民を背景として、ほとんどの大都市の人口は様々な文化的背景を持った人たちで構成されている。一方で、小さな町では移民が少なく、人々は多様性に慣れていない。
- 多文化の共存する社会には利点も難しい面もある。利点には貿易の増加（経済的利点）や、新しい文化が加わることで、食の選択肢が増えること、技能や技術の移転機会などが挙げられる。しかしながら、多

文化の共存する社会での暮らしは必ずしも容易ではない。例えば言葉を覚えるなど、否が応でも新しい文化を学ばざるを得ない。表面的な交流は、偏見を生みやすく、その状態がひどくなると、政治的な差別や民族差別にまでつながってしまう。

- e. 「新しい文化」ゲームを通してPYが学んだのは、自分と違う文化的な背景を持った人と出会った時には、常にものごとを受け入れる姿勢と柔軟さを保ち、積極的に学び、分からないことは尋ね、必要な手助けを求めることをためらわないようにするということである。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- 東南アジア及び日本の地域全体に見られる文化的表現方法の似た面と違う面をさらに探る。
- 共通する部分を見つけ出すと同時に、多様性の価値を認識する方法を探る。

活動

- 国別発表（国別課題1）：それぞれの国で、人生の節目に広く行われている儀式について発表する。最低でも誕生、成年としての儀式、成熟期（結婚など）、死、の4つは取り上げること。発表は、Pecha Kuchaという形式で行い、1枚20秒のスライド合計20枚で構成。
- 全体ディスカッション：東南アジア及び日本の文化的習慣の類似点と差異を見つける。
- ゲーム：雄鶏の鳴き声に乗って、それぞれの国での数の数え方（発音と表記）を当てる。

成果

- Pecha Kuchaプレゼンテーションを通してPYは、誕生から死までの間に行われる伝統的儀式という切り口から、東南アジア及び日本という範囲の中での自らのコミュニティのことを、よりよく知ることができた。
- 数の数え方（発音と表記）など、この地域内の文化的習慣には多くの類似点があることを認識した。
- 伝統文化における祭事は、宗教と地理の影響を大きく受けている。例えば、東南アジアの大陸部では、一般的に成人の儀式は仏教の受戒に続けて行われる。フィリピンやインドネシア、ブルネイ、マレーシアでは、成人の儀式には割礼などの特別な儀式が伴う。日本では、成人式が行われる。
- 習慣の差異でPYが特に興味を持ったのは、プロポーズの仕方と、葬式についてであった。葬式について言えば、土葬や火葬は葬式の形のごく一部であることを学んだ。例えば、東南アジアの一部の民族では、今でも棺桶を岩の中や洞窟の中に置く方法が採られている。

- e. このセッション全体を通してPYは、東南アジアと日本という地域が非常に多様性に富んだ場所であることを学んだ。誰かの文化的な表現をおかしいとか一般的ではないと決めつけるのではなく、さらにたくさんの方のことを学ぶ方が面白いのだということで、PYの意見が一致した。

フィリピンでの課題別視察

施設：国家文化芸術委員会(NCCA)

活動

訪問先では、地元青年が温かく出迎えてくれ、絵画展示場を通して講堂へと連れて行ってくれた。講堂での企画のメインはNCCAの委員長Felipe M. de Leon, Jr.氏による歓迎のあいさつと、それに続くDr. Wilfrido Villacorta氏による講義「フィリピン文化について及び東南アジア諸国や日本の文化との類似性について」であった。Dr. Villacorta氏は、元フィリピン国アセアン大使及び常駐代表である。

Q&Aセッションでは、多くのPYが質問をした。この場所で得た情報が、DGに関連していること、そして講義自体が聞き手との双方向形式であることがよく表れていた。その後、UP Tugtugang Musika Asyatika (TUGMA)という団体に所属する若者たちの招きで、フィリピンの伝統楽器と一緒に弾く体験をし、地元の若者たちとさらに交流を深めることができた。

視察から学んだこと

- 行動の傾向は、社会文化的な背景の影響を大きく受ける。講義を通して、社会は大きく二つに分けられることを学んだ。農業社会と工業社会である。どちらの社会も個人の生活習慣に影響を与える。同時に、我々は社会環境や他者との交流、体験することなどからも様々な影響を受けている。
- 文化的な活動の行われ方や目的は、一見同じように見えるかもしれないが、すべての文化は独自性も持っている。我々のすべきことは、一人一人の中に文化的な賜物を見出し、それぞれの賜物を堂々とほかの人たちに紹介することである。
- 楽器の演奏にはチームワークが大切であり、必要である。この音楽ワークショップで楽器を演奏すること自体は難しくないが、一人で演奏しても音楽と呼べるものにはならないということ学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 社会における文化の多様性について掘り下げる。
- 個人の文化的変動性を掘り下げる。
- 異文化理論における概念をさらに深く学ぶ。

活動

- 小グループ・ディスカッション（個人課題1）：7つ

のグループに分かれて、Pecha Kuchaプレゼンテーションで紹介された人生の節目の儀式に関連する個人的な経験などについて話し合った。このディスカッションでは、伝統行事を現代の生活の中でも維持するという点に主眼を置いた。各グループでの話し合いの内容を全体で発表した。

- b. ゲーム：PYは、あるお話の登場人物の役を割り振られた。そのお話は、Lailaという少女が恋人Sinbadに会うために危険な川を渡るというもの。そこに現れた3人目の登場人物Brutusは、Lailaが彼と一晩を過ごすことを条件に川渡りを助けると申し出た。Lailaは、親友であるAndyに助言を求めるもAndyは答えることができない。8人ずつのグループに分かれて、この話の中で一番悪いのは誰かを話し合った。
- c. 全体ディスカッション：各小グループは、一番悪いと思う人物を挙げ、その理由を説明した。一つのグループの説明の後、ほかのグループがコメントした。すべてのグループの発表の後、ファシリテーターがいくつかの理由を取り上げ、ホフステードの文化的多様性理論から解説した。引用されたのは、個人主義と集団主義、女性的か男性的か、社会的権威による距離、不確定さを避ける度合いの差などである。

成果

- a. 人生の節目の儀式に関しては、東南アジアでも日本でも、親族主に意思決定に関わっている。
- b. 何人かのPYは、伝統を次世代に引き継ぐためには多くのお金と努力が必要であることに気付いた。しかしながら、ほとんどのPYは伝統の維持に積極的である。伝統は、家族の絆を強く保つのに役立ち、アイデンティティの一つでもあり、地元にも根付いている知恵を学ぶ手段でもあるからである。
- c. ゲームを通して、文化的多様性について学ぶことができた。個人主義と集団主義、女性的と男性的、不確定さ回避などである。さらに、まとめとして行われた個人評価調査を通して、ホフステードの文化的多様性論の詳細を学んだ。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. 修得した知識を、より大きな異文化体験の現場に活用すること。
- b. 各国で行われている異文化理解促進のための活動を共有する。
- c. 地域における異文化理解促進に関する課題を分析する。

活動

- a. ロールプレイ：3つの分野でのケーススタディを通して、異文化理解に関する問題への対応力を試した。分野は、人道、ビジネス、国際教育である。6グルー

プに分かれて少人数でそれぞれのケースの解決策を話し合い、結果をロールプレイの形で発表した。

- b. 全体ディスカッション：ロールプレイを終えて、将来実際にこのような問題に直面した時に助けとなるどんな学びがあったかを話し合った。
- c. 小グループ・ディスカッション（個人課題2）：それぞれの国で、多様性に対応するために取り入れられている模範的な活動例を共有する。課題エッセイに書かれた内容を基に、興味の近い者同士が一緒になるようにグループ分けした。

成果

- a. PYは、異文化理解力がビジネスや教育、人道など様々な分野で使えることを理解した。
- b. PYは、ほかの文化に対する柔軟性と思いやりの大切さのほか、自分のアイデンティティを表明する勇気の大切さにも触れていた。すなわち、文化に関する人々の間でのやり取りは、双方向のものでなければならぬということに気付いたということである。
- c. PYは、人々の興味関心が似通っているような社会で、異文化理解促進の不足からくる様々な問題にどのように対処するかという点について、それぞれの考えを共有した。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- a. 自分自身の文化にさらに強く意識を向け、それが自分の将来にどのように影響するのかを知る。
- b. 異文化理解をさらに進めるための計画を立てる。
- c. 課題やアイデアを分析し、計画案を改善する。

活動

- a. ビデオ上映：セッションの初めに2本のビデオを上映した。1本目は、カルチャーショックについて、2本目は、ナイジェリアのChimamanda Aidhieの「シングルストーリーの危険性」のビデオ。2本目のビデオでは、情報の不足から人々に状況が伝わらない一部の人の暮らしのこと、特に少数民族のことが扱われている。
- b. 全体ディスカッション：自分の体験したカルチャーショック及びその影響について話し合った。
- c. 小グループ・ディスカッション：「シングルストーリーの危険性」で見たことを参考に、異文化理解に関連して自分自身の物語を人々に伝えるためのアイデアを話し合った。

成果

- a. PYは、単なる誤解だけでなく、異文化への無理解や、自らの文化へのうぬぼれも大きな問題を生み出す可能性があることを学んだ。
- b. 「シングルストーリーの危険性」を見て、人種偏見や

差別、先住民族の文化を見下す態度などの大きな問題は「無知とうぬぼれ」から始まっていることに気付いた。

- c. PYは、古来からの文化や伝統文化にもっと人々の意識を向けさせるためのアイデアを出し合うことができた。
- d. このセッションで出されたアイデアは、この後に続く活動にとって非常に大切なものとなった。プロジェクトマネジメントに関するワークショップでは、PYはこのセッションでのディスカッションをもとに、プロジェクトを組み立てることができた。また、同じ国のPYが集まって、異文化理解促進に関する事後活動案を作り始めることもできた。

D. 決意・期待される今後の活動

世界のほかの地域と比較しても、東南アジア及び日本は明らかに多様性に富んだ地域である。地理的な条件の違いのほかにも、この地域には多様な言語、宗教、信条、そして民族が存在する。この地域でのここ数十年間の政治的安定を背景に、経済協力も大きく進んできている。このような状況の中では、多文化共生型の社会を築いていくことが非常に重要なのは明らかである。

PYは、東南アジアと日本の若者たちの抱える最も大きな課題は、自分自身と隣国の文化に対する理解の不足だということに気付くことができた。また、文化の風化が進み、それに伴ってアイデンティティの崩壊がおこっていることも明らかである。この傾向は、特に近代化及びメディアや情報の影響の拡大によってもたらされている。同時に、近代化やメディア、情報などを異文化理解の推進のために用いることができるということも、PYとしての大切な学びであった。

DG2に参加したPYは、この活動中に多くのアイデアを出すことができた。異文化理解を促進するためのイベントの企画やソーシャルメディアでのキャンペーンに向けて、各自のやる気を強めることなどである。

立案された具体的な活動は、以下のとおりである。

- 課題：日本及び東南アジアの社会に対する先入観や誤解
 行動：ハッシュタグ#Get2Knowを使ったソーシャルメディア・キャンペーン
 目的：日本や東南アジアの文化に関して人々が持っている間違っている、あるいは不適切な情報を修正して、よりポジティブなイメージを広めること
- 課題：先住民文化を見下す傾向
 行動：文化交流
 目的：もっと旅行をして、背景の違う人々と交流すること
- 課題：伝統文化への興味の低さ

行動：デジタル媒体作成やキャンペーン（漫画、歌、ビデオ、映画、ドキュメンタリー、写真などを使う）、教育で地元に関する内容に力を入れる（家庭内教育と学校教育）、文化イベントを開催する、現代文化やポップカルチャーと連携する。

目的：地域の若い人たちの注意をひき、若者がその土地の文化を継承し広く伝えていけるようにすること。

- 課題：人々が日本や東南アジアの家庭や社会を直接的に体験する機会が少ないこと

行動：家庭訪問プログラム。日本や東南アジアを旅行する人たちが、ホームステイをして交流できるようなシステムを作る。「東南アジア青年の船」事業でのホストファミリーに似ているが、この案ではお金のやり取りが発生し、インターネットを通す形であることから、AirB&Bに近いと言える。

目的：旅行者を主な対象とするが、誰にでも地元の人たちの日々の生活を体験する機会を提供すること。

以上のようなアイデアのほかに、DG2のPYは是非とも「JASEAN Cultural Calendar 2016」を作りたいと考えている。このカレンダーには、ASEAN10か国と日本で行われる最も魅力的な文化イベントを5つずつ掲載するもので、これを広めることで域内の人々が、特に若者たちがもっと旅行をしなくなり、東南アジアと日本の人々や土地のことをもっと知りたいと思うようになる。カレンダーは、印刷されたものとデジタル媒体の両方で作られる予定。印刷版は、資金集めにも用いることができ、今後の事後活動を進める助けにもなるだろう。

E. 評価・反省(自己評価セッション)

自己評価セッションでは、1回目のセッションで設定した各自の期待と課題を振り返った。そのときに作った「期待の木」「課題の木」からそれぞれの付箋を取り、新しい付箋に目標に対する達成度を1から10で評価した。付箋の裏側には、期待を達成するのに必要なことを書き出した。

Score	Number of PYs
10	1
9	1
8	10
7	18
6	5
5	4
4	3
3	-
2	-
1	-

この表から、ほとんどのPYは期待に対してかなり高いレベルまで達成することができたことがうかがえる。全体ディスカッションでは、目標達成の一番の障害は、PYとしてこなさなければならない活動が非常に多くて疲れていることだとの声があった。

ディスカッションの内容に関して見ると、何人かのPYのコメントから今年の参加者がとても高い意識を持ってディスカッション活動に参加していたことが分かった。あるPYは、「大枠の話ではなく、特定の話題に関してさらに深く話せれば良かった」とコメントし、また別のPYは具体的な話題のディスカッションについて「文化の違いがどのような軋轢を生みだし、それをどのように解決できるのかなどについてより深い話し合いをした方が良かった」とコメントした。

1人のPYは、異文化に関する理論をさらに学びたかったとし「ホフステードの異文化に関する5次元の解析は、文化的多様性を説明する上での非常に優れたツールの一つであるが、多様性についてさらにはっきりと理解するために、もう少しほかの理論にも触れられたら良かった」とコメントしている。

一方で、PYの持つ背景が様々であるため、一部のPYにとっては、ディスカッションの内容に付いてくるのが難しかった。「DG2を選んだのは、テーマが簡単そうだったからだが、ディスカッション活動中には、とても難しい内容を扱うことが多かった」。

PYが力説しているのは、学びを深めるためには当事者から直接話を聞くことや、自分たちで直接体験することが欠かせないということである。私の予想に反して、アフリカの人々への偏見を題材にしたビデオが、PYにはとても人気があった。「シングルストーリーの危険性」という題のその映画があまりにも感動的だったので、成果発表会でも使いたいとのことである。

PYの書いた付箋には、「今まさに起こっている社会的な出来事をディスカッションに含めたい。そのような出来事に直接かかわっている人の声を聴きたい」というコメントも見られた。

PYが人々の体験などを聞いたり、自分たちで何かを体験したりできたのは、課題別視察においてであった。フィリピンでは、様々な国の間での文化の類似性に関する講義を聴いた後、伝統楽器のワークショップに参加した。参加型の講義と、ワークショップ形式の企画がPYの最も望む形のものである。

学びのアウトプットに関して、DG2のPYは様々な形を体験した。特筆すべきはPecha-Kuchaプレゼンテーション形式であろう。これが、新鮮な形式であっただけでなく、映像を用いたものであるため、内容の理解にもとても役に立ったと評価されている。

映像を使った発表について、あるPYは「Pecha-Kuchaプレゼンテーション形式で自分たちの文化を紹介

できたのはとても良かった。動画を使えばさらに良いのではないだろうか」とコメントしている。また、この形式で各国の発表時間に制限を設けたため、発表に続けて行われたディスカッションに多くの時間を取れたことも評価された。

改善点についてのコメントのほかに、ディスカッション活動を通して修得した学びに関するコメントもあった。修得したのものには、新しい知識のみならず、より高い技術やより良い姿勢も含まれている。学びとして挙げられたもののいくつかを以下に紹介する。

内容

- 自分の国の文化を紹介し、ほかの国の文化との類似点を学んだ。
- 地理的条件や宗教が文化に与える影響を学んだ。
- それぞれの文化の持つ価値を学んだ。また、我々の間にある違いがアイデンティティを生み出していることを知り、それを尊重し認めて受け入れることを学んだ。

技術

- 英語力が向上した。新しく難しい英単語を覚えた。
- 人とコミュニケーションをとるための能力が向上した。以前は、自信が無かったが11回のセッションを終えて、今では自信を持って発表することができるようになった。
- 将来の勉強につながるアイデアを得た。
- アイスブレイクの仕方、気分転換と効果を上げるちょっとした活動、小さなゲームや歌、踊りなどを覚えた。
- プロジェクトやチームワークについて学んだ。

姿勢

- ネガティブな偏見を取り除いてお互いを人として見る方法を学んだ。
- ディスカッション活動で最も大切なのは、必ずしも言語能力ではなくほかの人たちに伝えたいという情熱だ。
- 心を開くことで、たくさんの友人を得ることができた。

全体として、これらのコメントからPYがディスカッション活動を通して様々な学びを得たことが読み取れる。内容に関するだけでなく、12回のセッションを通して多くのPYは自信をつけ、様々な背景を持つ人たちの交流を楽しんだとコメントしている。このことから、多文化共生社会構築のために必要な一つの要素である人及び場所に関する強いつながりを作り出すことに成功したと行うことができよう。

F. ファシリテーター所感

異文化理解促進 (CCUP) は、SSEAYPのディスカッ

ション活動がより計画的な形で行われるようになった当初からのテーマの一つである。多文化共生社会の構築は、「東南アジア及び日本の青年たちの間に友好と相互理解を築く」という本事業の主な目的と深く関連しており、またそのような社会を達成するためには、CCUPが柱となることが指摘されている。東南アジアと日本を含め、世界の人々相互の交流が増えていることも明らかである。これらを考慮すると、本事業では異文化理解についてのディスカッションは常にその目的に即してしたものであり続けるだろう。

このグループの主眼は多文化共生社会の構築という点に置かれていたが、準備段階で目標や目的を設定するのは難しかった。文化に関するディスカッションが幅広くて複雑な話題を扱うからというだけでなく、それらの目標や目的の達成度を測る指標の設定も難しいからである。ディスカッション全体の紹介文に、異文化理解の「促進」の部分盛り込むことの難しさは、申し上げるまでもない。

いくらかの話し合いや調査を経て、共生社会とは寛容性が高く、争いごとの少ないコミュニティで、そこでは人々の間及び人と土地の絆が強い、ということを見出した。であれば、このような条件はディスカッションを通してだけでなく、活動中の12回のセッションでのPY間の交流を通して効果的に達成できると考えた。

今年のPYの多くが、船上でのほかのどの活動よりもディスカッション活動に興味があると言っていたのはとても印象的である。このような態度を導き出した一つの要因は、ファシリテーターの存在である。DG2では、PYはファシリテーターが次のセッションのために準備しているアクティビティやゲームがどんなものなのかをいつも知りたがっていた。

ファシリテーターとしては、5回のDGセッションと2回のプロジェクトマネジメントだけでなく、船内活動の期間全体を通して行われる合計12回のセッションの準備をするということは、なかなか難しいものがあった。

この面で提案させていただきたいことは、将来のファシリテーターたちは、今回8月のファシリテーター会議

で課題として出された7つのセッション以外の活動についても、事前に丁寧に準備しておくことが大切だということである。具体的には、導入セッション、まとめ、成果発表会準備、成果発表会、振り返り、などである。

SSEAYPにおけるディスカッション活動の重要性が高まり、船上及び訪問国でのほかの活動にも明らかに影響が出ている。例えば、ミャンマーとマレーシアでの課題別視察は、ソリダリティ・グループ(SG)での活動のはずであったが、実際にはDG向けとなっていた。全体的なコーディネートを考えて、これによってディスカッションテーマへの理解が深まるため、DG活動には役に立った。これは、結果的にはSGとしての活動を減らすことになる。しかしながら、SSEAYPは私がPYとして参加した8年前と比べても大きく変化してきているので、SG活動など船上での諸活動に変更が加えられるのも当然であろう。

今回ファシリテーターとして再び参加する機会を得て、非常に驚いたと同時にPYについてとても誇らしく感じたのは、彼ら彼女らがより真剣な態度でディスカッション活動に参加していたことである。例えば、成果発表会などの全体活動では、かけ声を出すチアやロールプレイ、歌などを使うことは許されておらず、そのような中で1日を過ごすことはPYには耐えられないのではないかと心配していたからである。私の参加した回るときとは違い、今回の全体活動は専門家による国際会議のようであった。また、会場からの質問への回答もとても素晴らしいものであった。ディスカッション活動へのPYの熱心で真剣な参加に心から賞賛の言葉を捧げたい。

今回、本事業に再び関わる機会をいただいたこと心から感謝します。ディスカッション活動でPYを手助けすることができたことは非常に光栄であり、さらにそれぞれのアクティビティでPYが示してくれた非常にポジティブなエネルギーから多くのことを学ぶことができた。PYのこのエネルギーは、必ずや私たちの未来を形作る重要な力になるだろう。私は、東南アジアと日本が、過去42年間にわたって大切に育ててきた相互理解と友好が実を結ぶことを心から信じている。



(3) 環境（自然災害と防災）グループ

ファシリテーター：Ms. Eudela, Ma. Lourdes Rosquillo

PY：40

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

日本とASEAN 各国における自然災害と防災への取組の現状を把握し、災害の被害を少しでも減らし、安全で安心して暮らしていける社会をつくるためにどのような取組が必要かを議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

- 参加青年は、日本とASEAN各国が抱える自然災害と防災やリスクへの意識を高め、地域の能力を向上させ、脆弱性を低下するために青年が実行できる取組を提案する。
- 自らの研究分野や専門性、地域での取組やボランティア活動に関連性がある適用可能な、青年主導による防災活動を提案する。

ゴール

- 自国が抱えるハザード（災害原因事象）、リスク、脆弱性、能力を分析してマップ化し、作成したハザードマップを、防災活動を提案する際の参考資料として活用する。
- 自然災害防止や防災の取組とベストプラクティスを学習・理解して自らの研究分野や専門性、地域での取組やボランティア活動に関連した提案を作成する上での参考とする。

B. 事前課題

個人課題1 防災専門用語

各PYは防災に関する専門用語（例：ハザード、脆弱性、事前準備、能力、被害抑止、リスク、予防、防災など）を調べ、理解しておくこと。

個人課題2 ハザードマップ

ハザードマップについて調べ、印刷したサンプルを持参する。防災関連のウェブサイトからダウンロードしたり、防災を担当する政府機関に要請したりすることで入手できる。自国のハザードマップを持参することを強く推奨する。ただし、自国のマップ入手が困難な場合は、インターネットから得られる他国のハザードマップを持参してもよい。

個人課題3 防災の推進者

自国で防災活動に強く力を入れている人物一名の物語を調査し、発表する。その人物が自国や地域で行っている、ベストプラクティスと考えられている防災プロジェクトや活動の例を表にまとめる。

国別課題1 災害情報

自国もしくは災害の多い国を参照しながら、次の点について答える。

- 該当地域のハザード、脆弱性、起こりうる災害を表にまとめる。
- 災害時に起こりうるインフラ、資産、生活への被害を削減し、人命を守るために現在実施されている取組を列記する。
- 自分のコミュニティや国が近年遭遇した災害による影響の例をまとめる。

国別課題2 兵庫行動枠組（HFA）

HFAについて調査する。HFAの合意事項に準じて定められた自国の防災関連法とベストプラクティスに焦点を置いた、パワーポイントによるプレゼンテーションを準備する。プレゼンテーションの時間は4～6分間。

国別課題3 防災に関するインタビュー

自国の人々が防災をどのように理解しているかを表す2～3分のビデオを作製する。理想的には、無作為に抽出された人々への率直でくれた形のインタビューが好ましい。

国別課題4 防災の推進者

世界各地（アジア、ヨーロッパ、アフリカなど）で発生した自然災害を示す写真を5枚印刷・持参する。写真の裏側にはラベルを貼付し、災害名と発生場所を明記すること。インターネット上からダウンロードした写真でもよい。写真の裏側に出版とリンクを明記することが重要。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：東京臨海広域防災公園（そなエリア東京）

一般社団法人防災教育普及協会

活動

- 地震シミュレーション
- 施設見学
- 地震に関するビデオ（アニメ）の鑑賞
- 宮崎賢哉（一社）防災教育普及協会事務局長による防災に関する講義（青年による防災活動参加）

視察から学んだこと

- シミュレーションとサバイバル・クイズを通じた、緊急時に生き延びるための実践的なヒント
- 人々に情報を伝達するには、型通りのプレゼンター

ションよりも双方向・実践型のアプローチで意識を高める方が効果的である。

- c. 「普段できないことは緊急時にもできない。普段でできることだけが、緊急時にできることである。その時何ができるかは、それまで何をしてきたか」というPYへの宮崎事務局長からの言葉。
- d. 「目黒巻」を利用した、災害発生時の経過と取るべき行動の記録・整理方法。
- e. 教訓はアニメを通じて伝えることが可能である。子供の興味を引く形で防災のテーマを学校のカリキュラムに導入する、画期的な方法が存在する。
- f. 臨海広域防災公園は、東京に大災害が発生した場合に日本政府が適用する業務継続計画の中核として指定されている。
- g. 日本では避難場所や災害に強い建築物といったハード面の対策だけでなく、防災を学校のカリキュラムに取り入れる、避難訓練やシミュレーションを行う防災の日を設定するといったソフト面の対策も実施されている。

グループ・ディスカッションI:

ねらい

- a. 災害の種類について学ぶ。
- b. 防災に関する専門用語や概念を理解する。
- c. 人々の防災に対する認識を知る。
- d. 災害が人々や地域に与える影響を認識する。

活動

- a. 個人目標の設定：PYはディスカッション活動の中で個人として達成したい目標を記入。
- b. 日本での課題別視察の振り返り：課題別視察での主な学びや要点を共有。
- c. 写真展示：世界各地の災害の写真を展示し、災害の影響について考えを巡らせた。
- d. 防災用語のマッチング：グループに分かれ、配られた専門用語と定義を合致させた。
- e. 国別プレゼンテーション：防災に関する日本とASEAN各国の人々の考えを確認するインタビューのビデオを鑑賞。
- f. ビデオ鑑賞：国連開発計画（UNDP）と国連人道問題調整事務所（OCHA）によるビデオ「Act Now, Save Later」を鑑賞した。事前準備への投資が、災害の多い地域に住む人々のリスク削減に与える影響を表したビデオである。

成果

- a. PYは、災害には台風、地震、火山の噴火、干ばつなどの自然災害によるものと紛争、戦争、伝染病などの人的災害があることを理解した。
- b. 「地域の災害リスク = ハザードの度合い × 脆弱性のレベル / 保持する能力」という「防災の公式」を理

解した。ゆえに、ハザードとはその影響が人々の対応能力を超えた場合にのみ災害となる。

- c. 人々にどの程度防災に関する知識があるかを表した国別課題のプレゼンテーションを通じて、ASEAN各国の人々は防災に関する意識が限定されているか、意識が無いことに気付いた。災害が多く発生する日本では防災関連の講座の開催や活動が進んでおり、学生にさらなる勉強や、参加を広めることを促している。
- d. 津波や台風を直接体験したことのあるPYからの発表によって、他のPYも災害に見舞われる厳しさを知った。生存性のカギとなるのは事前準備である。
- e. 主な防災用語を理解し、実践的な文脈に応用することができるようになった。

グループ・ディスカッションII:

ねらい

- a. 日本とASEAN各国が直面しているハザードやリスクの現実的な姿を描く。
- b. 各国や地域全体で災害の影響を増幅・削減するきっかけとなる可能性がある、現存の脆弱性や能力を浮き彫りにする。

活動

- a. 参加国ごとの能力と脆弱性のマッピング
- b. マッピング結果の国別プレゼンテーション

成果

- a. 日本とASEAN各国は類似したリスクとハザードを抱えているが、各国が持つ脆弱性、能力とベストプラクティスの違いにより、受ける影響は異なることを学んだ。
- b. 類似したハザードや課題を抱える国家間の協力の重要性と具体的な同意の必要性に気付いた。メコン川流域の国々の例から、一国の経済発展に向けた活動が周辺国に影響を及ぼしたり、周辺国が直面するリスクレベルの増加につながったりする可能性を理解した。
- c. PYは、ASEAN各国のほとんどの人々が災害に対して日本人とは異なる反応を示した点に着目した。地震が発生した場合、日本人は屋内にいる際には安全を確保するために机の下に隠れるように教わっているが、ASEAN各国の人々のほとんどは、直ちに屋内から脱出して戸外の開けた場所に向かうよう教わっている。

フィリピンでの課題別視察

施設：マニラ首都圏開発局（MMDA）

活動

- a. MMDAに関する短いビデオ鑑賞
- b. 交通管理センターでのシステムと日々の運営につい

での説明

- c. 地震試験施設でのシミュレーション訓練
- d. 洪水管理センターでの洪水管理システムについての説明

視察から学んだこと

- a. 緊急時（例 地震、洪水、台風）に生存性を高めるためには、どのような対応をするべきか。
- b. 地震と洪水に対する認識と正しい知識、自然災害が発生した場合に個人として取るべき対策。
- c. 各政府機関の間での迅速で効率的なコミュニケーションと調整が、災害発生時のリスク軽減につながり、起きる可能性のある被害を低下させる。
- d. 国民に必要なあらゆる取組を行うために、防災対策に十分な予算を計上することが政府にとって重要である。
- e. 事前準備と災害対策においては、地域や様々な政府機関、国際非政府組織の参画が極めて重要である。
- f. 緊急時や災害時に、携帯アプリなどの社会的基盤を効率的に利用して情報をリアルタイムに発信することで、人命を救うことができる。

グループ・ディスカッションIII:

ねらい

- a. 日本とASEAN各国で災害の影響を増幅もしくは低下させる可能性のあるハザード、現在の脆弱性、能力をマッピングする。（セッションIIからの続き）
- b. 課題別視察から学んだ点と現在議論している防災の取組を関連付ける。

活動

- a. 振り返り：フィリピンでの課題別視察の感想共有
- b. 国別プレゼンテーション：セッションII に続いて、マッピングの結果の発表
- c. マッピング：地域が直面しているすべてのハザードを記録する。日本とASEAN各国を網羅する大きな地図を使い、各国におけるハザード、脆弱性、能力について考察する。その後、結果を発表する。

成果

- a. アジア地域では日本、フィリピン、インドネシアが他の各国と比較して災害の多い国々であると理解した。これらの国では定期的に自然災害に見舞われており、台風や地震は生活の一部であると言うPYもいた。そのため、これらの国々では近隣国よりも防災の対策が多く見られる。
- b. プレゼンテーションを通じて、シンガポールでは他国に比べて自然ハザードや脆弱性が少ないながらも開発してきた能力について学んだ。
- c. 他国の経済発展活動が近隣国のリスク、ハザード、脆弱性を増幅もしくは低下させる可能性があることを学んだ。

- d. ある国が直面・経験するリスクの度合いや災害の数は、その国の置かれている地理的な場所に左右されることを理解した。
- e. OCHAによると、アジア太平洋地域は世界で最も災害の多い場所であり、過去10年間に世界で自然災害の影響を受けた人々のうち88%が同地域に居住していると学んだ。

グループ・ディスカッションIV:

ねらい

- a. HFA以後に日本とASEAN各国で取り入れられた防災の取組とベストプラクティスを理解する。
- b. HFAに合致したベストプラクティスを知る。

活動

- a. 国別プレゼンテーション：HFAの同意事項に関連した日本とASEAN各国における防災関連法とベストプラクティス
- b. オープン・ディスカッション：プレゼンテーションからの主な学びの共有

成果

- a. 日本とASEAN各国における兵庫行動枠組を反映したベストプラクティスについて学んだ。
- b. PYは、ラオス、シンガポール、ブルネイにおいて災害の発生に関わらず事前準備を行う重要性に関する理解を特に強調した。
- c. 各国のベストプラクティスを知り刺激を受けた。ベトナムの「Float in Floods（洪水で浮かぶ）」という、在校時に突然洪水が起こった場合に備えて児童にライフジャケットが縫い込まれたバッグを配るプロジェクトに感銘を受けた。もう一つの特筆すべき実践例は、防災に関心のある市民が集まり、開放的でリラックスした形で情報交換を行う、日本の「防災カフェ」の取組である。さらに、日本の自動販売機は災害発生時には市民に無料でWi-Fiへのアクセスを提供することがPYの興味を引いた。
- d. 国や地域が防災や災害管理の行動計画を持つことの重要性を学び、理解した。
- e. 施設や建造物の維持に投資を行い、公共に悪影響を及ぼすのではなく、人々を守る防災対策として持続させる必要性を強調した。

グループ・ディスカッションV:

ねらい

- a. 災害による地域への影響を特定する。
- b. 人々の能力を高め、脆弱性を低下させて災害による被害を軽減する重要性を理解する。
- c. シミュレーションを通じて災害の影響や感覚を伝える。
- d. 防災活動における青年の役割の重要性を学び、理解する。

- e. 防災の推進者を知り、彼らによる各地域での取組を知る。

活動

- a. シミュレーション/ロールプレイ：ビジネス、行政、（国際）非政府組織、地域の中から指定された役割を演じる。
- b. グループ内共有：実際に災害の影響を経験した、もしくは間接的に経験者の話を聞いたことのあるPYからの発表。
- c. ビデオ鑑賞：「Communication is Aid」
- d. 発表：事前課題として調査した防災の推進者についての発表。各分野で防災を進めるために彼らが行ってきた取組に焦点を当てる。
- e. 刺激の Patton を回そう：防災教育をどのように青年に広めるかに関する決意を書き出し、グループ内で共有する。

成果

- a. ロールプレイを通じ、事前準備対策と事前準備意識をさらに高める必要性を認識した。災害発生の前後に取るべき行動を知らない人々が未だ多数存在するためである。
- b. 直接災害を経験したことのあるPYの発表を聞き、災害が地域に深刻な被害をもたらすことを知った。
- c. 各地域で防災を推進している人々が行っている様々な取組やベストプラクティスを学んだ。
- d. 他国で防災活動を行っている青年たちの、小さくとも具体的な行動に刺激を受けた。防災の推進者となるためには必ずしも大規模なプロジェクトを実施する必要はなく、ビニール袋の使用をやめる、環境に関する講演を行う、といったことからでも始められると知った。
- e. 具体的な行動や、他のPYからの発表にあった防災の推進者の物語を、共有を通じて防災を広める決意を表明した。

D. 決意・期待される今後の活動

- 自国が自然災害の多い場所ではなくても、防災についての学びを進める。
- ハザードマップについてさらに学び、可能な地域にハザードマップを導入する。
- ディスカッション活動の各セッションから学んだ知識と経験を友人や家族と共有する。
- 自分の行動により大きな責任を持つことで姿勢を変える。
- 防災や環境に関する問題を決して無視することなく、仕事、学校や地域など自らが関わっている領域を通じてあらゆる方法で貢献する決意を持つ。
- 応急処置、心肺蘇生術、AEDのスキルを向上させ、友人をトレーニングに誘う。

- 自覚を持って、自分自身の準備を整える。
- 自然環境の保護・保全を通じて人々を守る。
- 防災の重要性に関して新聞に寄稿する。
- 環境と防災にまつわる問題に関して徹底的に議論を行うユースキャンプを開催する。
- 災害とその影響に関する地域の意識を高めるための情報や広報資料、教材を作成し、事前準備、被害抑止、災害防止の対策を共有する。
- 防災の専門家や実践者、スポンサーなどの協力を仰いで学校の教師に向けた訓練を行い、防災についてよりうまく教えたり、学生に向けたカリキュラムに導入したりできるようにする。
- 専門家の助けを借りて応急処置や救護法の訓練を行う。
- ソーシャルメディアやその他の創造的な方法を使って行政、青年、民間セクター、学校、その他の機関などを含んだできるだけ多くの人に伝え、防災意識を高めることができる事後活動を考える。
- 共通の目的を持った人々を探して協力し、防災プロジェクトを実行するために協力する。
- プロジェクトを提案したり、地域でのプログラムを考えたりする際には、災害による影響と持続可能性を考慮する。
- 開発プロジェクトについて調査する。特にグリーンエネルギーを推奨するプロジェクトについてよく調べる。

E. 評価・反省 (自己評価セッション)

セッションIで設定した個別目標について振り返る時間を取った。PYは5人組になり、目標を達成できたか否かを共有し、その要因を特定した。

全体発表では、たいていのPYが自ら設定した目標を達成し、防災とその重要性について理解したと述べた。直面しているハザードやリスクに対する意識が欠けており、事前準備のない地域への災害の影響を学んだ。

PYは実践的、直接的な面から防災の概念を知ることができたため、課題別視察が有意義であったとした。視察では専門家による発表が学びのハイライトであった。

ディスカッション活動での取組は、PYの防災に関する知識を広げた。数名のPYが2004年のアジアにおける津波や2013年の巨大台風「ハイヤン」を直接経験した話を共有したため、他のPYも災害が深刻な問題であり、防災活動を通じた具体的な対策が必要だと認識した。起こりうる自然災害やリスクに対する意識を向上させ、地域の脆弱性を減らし、能力を高めるための努力をさらに進めることをPYが確信したのが明確に見て取れた。

PYはHFAに合致する各国の努力を知り、枠組に基づいたベストプラクティスについても学んだ。規模の大小を問わず、防災を主流に押し上げるために活動する方々

の物語に刺激を受けていた。

PYは、ディスカッション活動のセッションが想像した程つまらないものではなかったと言及した。各セッションでの活動や、グループの親しみやすい雰囲気によって、評価・判断を恐れずに考えや視点を発表することが可能であったと述べた。

一般的に、第一希望としてDG3を選択したPYは、セッションの流れとそこからの学習経験に満足していた。PYは、ソーシャルメディアやその他の創造的な方法で、防災に関する情報を多くの人々に広めることを約束した。さらに重要なのは、PYが自分たちから良い変化を起こすと力説したことである。

F. ファシリテーター所感

あるPYになぜ船に戻ってきたのかを聞かれた時、衝撃を覚えた。即答することはできなかった。言い換えた方がいいような、誤った質問だと考えたからである。既参加青年なら誰も、何らかの形で船に戻ってくることを望むと考える。管理部長、ナショナルリーダー、OBSC代表者、ファシリテーターのいずれにも関わらずである。私はその質問に、自分の仕事と活動が本年度のディスカッション活動と関連性があったという幸運な偶然の賜物である点を強調して回答した。さらに、過去4年の間に特筆すべき災害の数々に見舞われたフィリピンの出身者として、学んだ教訓とベストプラクティスを共有し、災害の影響に対する人々の認識を高め、意識的な努力で人命を救うことが可能であることを伝えたかった。誰もが私のように共有する機会を得られる訳ではない。DG3の参加青年たちの学習体験を促進する役に私を選んでいただき、感謝している。

OCHAの報告によれば、アジア太平洋地域は世界でも災害の多い場所として知られており、自然災害の被害を受ける人々の88%が同地域に居住しているとのことである。2005年から2015年の間には、2008年にミャンマーでのサイクロン「ナルギス」、2013年にはフィリピンで巨大台風「ハイヤン」、そして2015年にはネパール大地震と、3件の重大な災害がアジア太平洋地域を襲った。この事実を鑑みて、アジアの人間は世界のどこの人々よりも防災と災害管理対策を真剣に考える必要がある。それを始めるにあたっての一番良い場所はどこだろうか。防災とは何であるかの認識を高め、人命を救うためにどんな対策が行われているかとどのような計画があるかを知る場所である。

一般的に、DG3の青年は世界で発生している災害の知識はあるが、2005年の兵庫行動枠組の同意以降に各国政府が展開している防災の取組についてはあまり知らなかった。しかし、プレゼンテーションやディスカッション、発表を通じて現在実行されている活動、政策、ベストプラクティスの数々を学び、実践的かつ実効可能と考

えるベストプラクティスを自国に持ち帰るための思案をする者もいた。

DG3には、参加の時点では背景、期待と共に異なるPYが集まっていた。防災に関する技術的な面をさらに学んで今後自分の専門分野での仕事に生かしたい者もいれば、あまり防災の知識がなく、基本的な学びの機会として参加した者もいた。PY間の期待値を擦り合わせるには、事前課題を含めてDGのテーマに関する情報を早期に提供することが必須であった。PYも十分な資料の読み込みや課題の準備を行うべきであった。

課題別視察と専門家とお会いしての防災に関する議論は、テーマへの興味を引く上で良い場となった。寄港地でも、ディスカッション活動に関連する課題別視察の時間や機会がより多くあってもよいだろう。ディスカッション活動のテーマに関連して各国で行われている取組を直接見ることで、PYの理解が深まる。

PYは実際に行動することで最も多くを学ぶ。体験学習に勝るものはない。学んだことを実践し、具体的な文脈に応用する場が必要なだけである。PYが最後の寄港地で課題別に講演や活動を行って青年と交流する、もしくはソリダリティ・グループとの共同作業でディスカッション活動に関連した活動する、といった可能性を模索してもよいかもしれない。

ディスカッション活動は同事業の中核とみなされている。この点は全参加国に強調されなければならない。「東南アジア青年の船」事業への参加にあたっては、単に日本とASEAN各国の青年たちと旅して楽しむ機会ではなく、参加青年が自国に帰った際に彼らが社会的な意識を高め、社会貢献に対するより強い関心を持つことが期待されており、後者より重要である点を意識させる必要がある。

各セッションは社会問題を紹介する門戸であるが、意識が芽生えた後にどうするかはPYの手に委ねられる。行動するか、そこでストップするかを本当の意味で管理できる者は、個々の青年以外にはいない。「東南アジア青年の船」事業からのすべての学びが、世界をより良い場所とするために貢献する、より良い人物を作ることが願って止まない。

「東南アジア青年の船」事業で培われた相互理解と友情を通じて良い変化の波が広がり続けることを可能とさせてくださっている日本政府に深く感謝する。日本青年国際交流機構（IYEO）と管理部長の方々の、信頼と効率的なサポートの数々に感謝したい。家を離れた地での家族であったファシリテーターの仲間にも感謝する。DG3の参加青年の全員にも、各セッションをお互いから学ぶ素晴らしい場としてくれたことに感謝する。第42回「東南アジア青年の船」事業に関わった全ての方々に感謝したい。みなさんは私の同窓生だ。将来、また我々の軌跡が交わることを願う。

最後に、このDG3のキャッチフレーズを記してお別れとする。「Know Disaster. No Disaster (災害を知ること



で、災害をなくそう。)」みなさんの末永い安全を祈っている。



(4) 食育グループ

ファシリテーター: Ms. Saengnapha Uthaisaengphaisan
PY: 35名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

日本及びASEAN 各国における伝統的な食文化、農業や食糧事情なども取り上げながら、生涯を通じて健全な食生活を実現するために青年ができることについて議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

- PYが食育の重要性に気付くこと
- PYが生涯を通じて健康的な食を広めていくこと
- PYの働きかけにより、ほかの若者たちがそれぞれの地域で食育を推進するようになること

ゴール

- 教育的な戦略、特に健康に関連する生活習慣を変化させる上での戦略を理解する。
- 日常生活に健康的な食を取り入れる。
- 地域の産物と大量生産品との対比の中で、農場から食卓までの食品の流れに関心を持つ。
- ASEAN各国及び日本の伝統的食文化の価値に気付く。

B. 事前課題

個人課題:

- 健康的な食と運動を組み込み(さらにほかの要素を入れても良い)、最も健康的と思うライフスタイルを丸1日実践する。その1日について、何をしたかの詳細とその日に感じたことをA4用紙1枚にまとめる。
- より健康的な暮らしにシフトした人、又はより健康になった人にインタビューする(例: 禁煙した、禁酒または飲む量を減らした、特定の食べ物をやめた

もしくは量を減らした、体重管理をしている、座ってばかりの生活をやめた、運動量を増やした、歩いて通勤している、野菜摂取量を増やした、有機農産物の利用を増やした、など)。所定のインタビュー用紙を用いること。さらに、自分自身の言葉で5から10の文を書くこと。

- 伝統的な一つの食べ物の写真を4枚コピーする。メインディッシュでもデザートでも良い。その食べ物が国の伝統とどのように関連しているか、またその食材が地域でどのように栽培されているかを書き留める。さらに、その食べ物の材料やカロリーなどについて、好きな(又は)きれいな理由などについて共有できるようにしても良い。これらを1~2分で発表できるよう準備する。

国別課題:

食育に関連している自国の団体について口頭での発表を準備する。団体は、政府機関、民間、国際組織、財団、チャリティー団体など、どのようなものでもかまわない。発表用の資料は、パワーポイント5枚を超えないこと。A4サイズ5枚以内のプリントがより好ましい。できれば写真も入れること。

内容には以下を含むこと

- 団体の主な活動
- 事業の主な対象者
- 団体の財源と予算
- これまでの成果

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：株式会社タニタ総合研究所

活動

- タニタの健康関連研究や製品についてのお話
- 栄養と心身の健康に関するお話
- タニタ博物館訪問
- 体組成の分析
- タニタのヘルシーメニューのランチ

視察から学んだこと

- タニタの創設や歴史について。同社は、もともと家庭用体重計を大手メーカー向けに生産していたが、現在では健康分野に重点を置いて事業を展開している。製品には、歩数計、活動量計、デジタル体重計、睡眠計、温度計、湿度計などがある。
- タニタの健康的なライフスタイル6習慣（禁煙、少なめの食事とお酒、一方で睡眠、運動、コミュニケーション（職場や地域で）はより多くする）
- 同社を有名にしたタニタ食堂とその健康食レシピ。同レシピは、日本全国で多くの人に利用されているのみならず海外のいくつかの国でも使われている。
- 健康状態に影響を与える要素について。例えば、十分な睡眠は成長ホルモンの分泌を促す。体脂肪率は、適正な性ホルモンの分泌に影響を与える。運動とカルシウム摂取は骨密度に影響を与えるなどである。
- 体の4つの基本組成（脂肪、水分、筋肉、骨格）とその機能。例えば、脂肪分は耐寒耐熱と衝撃吸収の役割を持っている。水分は体内器官の機能を維持するのに役立っている。筋肉は、体の動作を生み出し、骨格は体の姿勢を保っている。
- 体組成分析の結果から読み取れることと、改善の必要な点。データとしては、区域解析、体内水分レベル、筋肉量バランス、内臓脂肪率などを用いた。
- 質疑応答のセッションでの様々な健康関連アドバイス。例えば、ナトリウムの摂取と高血圧の関係、砂糖の摂取と糖尿病の関係、カップヌードルやフライ食品が体に及ぼす影響

グループ・ディスカッション I:

ねらい

- 学びを共有する。
- 食育が心身の健康にもたらす効果を理解する。
- 英語で話し合うことに慣れる。

活動

- 日本での課題別視察を振り返る。
- グロッサリー手法を用いて食育のコンセプトを再認識する。
- ディスカッション・グループ（DG）への貢献や、ほかのメンバーに助けてほしいと思う点などについ

て、ディスカッション前の個人的なまとめをする。

- 人間ビンゴゲームを通して、ほかのメンバーから食育に関連する情報を得、それについて話し合う。
- 自分自身への手紙という形で各自のゴールを設定する。
- 個人課題aについて話し合う。

成果

- PYは、食育に関する基本的な知識を習得すると同時に、企業の実践例として従業員の健康的な生活を推進する取り組みを学んだ。PYはまた、適切な環境が健康的な生活習慣を保つ助けになることを学んだ。訪問先企業では、従業員の実践を助ける仕組みとして企業戦略、施設、必要な機材類などを提供していた。
- PYは、カロリー、日本語の「食育」、肥満度指標など、食育に関連する基礎用語を理解した。
- PYは、英語力や食育に関する知識の不足、肥満とやせ過ぎ、雰囲気硬すぎて双方向のやり取りが少ない点などに懸念を表明した。
- このディスカッション・グループに入るに当たってのPYに共通の期待は、1) ほかのPYと意見交換をする機会2) 英語力の向上と自信を付けること3) ほかの国の食文化やレシピについて学び、味わうこと4) 体重を減らす、又は増やすための適切なアドバイスを得ること。特に、カロリーの計測方法について学ぶことであった。そのほかの期待としては 1) 食品産業と農業について学ぶこと2) 船内の食品備蓄状況と食品廃棄物の処理方法を学ぶことが挙げられた。
- ディスカッションが友好的でお互いに敬意を払ったものとなるよう、また競争的な雰囲気や批判的な雰囲気を作らないよう、PY自身が声をかけ、互いに注意を払った。また、ディスカッションに皆がついてこられるよう、難しい単語を使わないこと、文は簡潔にすること、そしてゆっくりとしゃべることを確認し合った。
- 人間ビンゴゲームを通して、ほかの参加青年についてよりよく知ることができたと同時に、英語を使う雰囲気にも慣れることができた。
- PYは、各自が取り組んだ「最も健康的な1日」が、心身共に気持ちの良いものであることを認識した。
- ディスカッションを通して、健康的な生活を送るための個人目標に向けてより強い動機付けを得ることができた。

グループ・ディスカッション II:

ねらい

- より健康的な生活習慣に関する情報や、より健康的な生活への順応の仕方を共有する。
- 健康状態の改善に向けて、船上で健康的な食生活をするのを再度決意する。
- 英語でのディスカッションにさらに自信を付ける。

活動

- 個人課題aについてディスカッション
- 小グループで「健康な1日」をデザインし発表する。
- 船上での食生活について各自で熟考する。

成果

- PYは、健康的な生活が実用的で現実的であること、そして多くの場合、食や栄養に関する事柄以上の様々な活動が関係することに気付いた。例えば、体を動かすこと、歯の健康、心の健康、人々との交流などである。PYはまた、最も広く行われていることとしてファストフードを避けること、朝食を抜かないこと、よりたくさんの野菜を食べること、運動すること、仕事のある日にもリラックスする時間を取ることなどがあることを学んだ。
- 小グループで、個人課題aの結果を共有し、健康的な生活とはどういうものかについて話し合った。その中で、様々な活動や食べ物がPY間で共通していることが分かり、そのことから、健康的な生活には食だけでなくすべての要素を取り入れる必要があるとうことで、どのグループも意見が一致した。
- PYは、船上では健康的な食生活をするのが必ずしも容易ではないと感じた。各自の食の選択や摂取は、様々な要素から影響を受けるからである。しかしながら、そうではあってもやはり自己管理が一番重要な点であることに変わりはない。

フィリピンでの課題別視察

施設：フィリピン女子大学

活動

- フィリピンにおける食育に関する講義
- フィリピン料理の実演（チキンアドボ、フィッシュサラダ、バナナケーキ、エッグカスタード）
- 訪問地のフィリピン料理を昼食に頂く

視察から学んだこと

- フィリピン政府機関が5年ごとに作成する健康関連統計から国民の健康状態を読み取ることができるが、それによると貧困と栄養不良を減らすというミレニアム開発目標（MDGs）の項目達成にはさらなる取組が必要なことが分かる。
しかしながら、国民の貧血症は改善し続けており、子供の消耗性疾病と栄養不良のケースも減っている。フィリピンの抱える2面性を持った問題は、同国に栄養不良と肥満の両方の問題が同時に存在することである。成人の間では、慢性病である高血圧と糖尿病が増加している。成人の10人に1人が慢性的なエネルギー欠乏状態である一方で、10人に3人が肥満である。
- 副学長の示唆に富む言葉「栄養は未来の薬である」
- フィリピンの地域別食習慣：大きくは、ルソン島、

ビサヤ諸島、ミンダナオ島の3ブロックに分けることができ、地域ごとに資源も農業も違うため、食文化にも差がある。

- フィリピンの食文化には、全体的にスペインの影響が見られるが、同時に、マレー系料理とポリネシア系料理の融合したものと言うこともできる。
- 実演を通してフィリピン料理を体験し、直接味わう機会も得た。
- 味付けは全体的に甘味があり、よく使われる食材にはバナナ、ココナッツ、鶏肉、そしてスパイス類がある。

グループ・ディスカッションIII:**ねらい**

- ASEAN各国と日本の伝統的な食文化への理解と認識を深める
- フィリピンでの地元の食事に関する体験から学び合う。
- 現地の食の中から、より健康的なものを挙げてみる。
- 食育についての実際的な体験をする。

活動

- 各PYは、個人課題cを発表する。
- 地元の食事を体験する：訪問国活動中にPYが食べたフィリピン料理の名前とレシピ（一部の料理のみ）をリストにした。
- フィリピンでの課題別視察について振り返りをする。
- 船上活動「ほかのPYを巻き込もう」の説明：一人のPYをターゲットにして、健康的な活動をするように情報を伝えたり説得したりする。

成果

- PYの発表で、35種類の伝統的な食べ物が紹介され、特にASEAN各国に共通する料理があることが分かった。
- 11か国から紹介された伝統食は以下のとおり
 - ブルネイ
Ambuyat, Buahulu, Penyaram or UFO
 - カンボジア
Prahok, Koroko, Nom Ansom
 - インドネシア
Rendang, Tumpeng, Kapurung
 - 日本
ラーメン、納豆、赤飯、天ぷら
 - ラオス
Laap pa/seen, Khao Tom, Olam
 - マレーシア
Nasi Lemak, Lemang, Lempeng Kelapa
 - ミャンマー
Kaw Bouk, La Bat Toat, Bane Mone
 - フィリピン
Halo Halo, Tinulang manok

- シンガポール
Laksa, Ice Kachang
 - タイ
Somtam, Tom Kha Gai, Pad Thai
 - ベトナム
Mi Quang, Canh Chua, Thit Dong, Goi Cuon, Banh Cuon
- c. PYは、伝統的な食べ物に使われる食材やその調理法は、その国の文化や気候、産物、宗教などにも影響を受けていることを認識した。例えば、もち米とバナナは、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアでよく用いられ、ココナッツをベースにしたカレーはマレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ブルネイでより多く食べられている。生野菜にスパイスを利かせた料理は、ラオス、ベトナム、北部タイでよく食べられている。
- d. 食べ物の由来について紹介し合う中で、PYはそれぞれの食文化への外国の影響についても学んだ。例えば、ポルトガルの影響を受けた日本の天ぷら、フィリピン料理に見られるスペインの影響、中国・インド・マレーの食文化が融合したシンガポールの食などである。
- e. PYは、課題別視察の準備のために払われたであろう多くの努力と、各訪問先組織でのよく練られたプログラムに感謝を表した。
- f. 船内活動「ほかのPYを巻き込もう」に同じ国のメンバーで取り組む中で、共同して計画し実行に移す方法を学んだ。この活動では、コース外のPYにより健康的な生活をするよう働きかけた。活動する上での難しさについても話し合った。

グループ・ディスカッションIV:

ねらい

- a. 地元産食料品と大量生産食料品それぞれの利点、欠点を理解する。
- b. 食育を実際に体験する。
- c. 健康教育におけるKAPモデル (knowledge-attitude-practice model) とその限界を理解する。

活動

- a. これまでのセッションでの学びを共有し、振り返る。
- b. 船上課題「ほかのPYを巻き込もう」の経過を共有し成功例や失敗例を基にディスカッションする。
- c. 小グループで、地元産食料品と大量生産食料品について話し合う。

成果

- a. PYは、知識や情報を提供するだけでは人の習慣を変えることはできないことを理解した。ほとんどの人は、健康的な生活や良い食について既にいくらかの

知識は持っており、それらに好意的な意識も持っている。しかしながら、その人たちを実際に行動するようにさせるのは難しい。その一步を踏み出させるきっかけが必要である。

- b. 健康的な生活をするように巻き込む上で一番難しかったのは、医師や看護師など健康に関する知識の豊富なPYであった。それらのPYは、健康的な食を日常生活に取り入れようとする動機付けが低いのである。
- c. PYは、ほかの人たちを巻き込もうとする際に、自信を持ってなかったという点で意見が一致した。計画を立てる段階では容易に思えたのだが、実際の活動は難しかった。より良い詳細な計画を立てる必要がある。ほかの人たちを巻き込もうとする前に、まずは自分自身で健康的な食生活を実践する必要があることにも気付いた。
- d. PYは、「地域の食」を次のようにまとめた。
 - 文化や伝統と関連している。
 - 祖国や家族を思い出させる。
 - 家庭で作られ食べられている。
 - 地域産の新鮮な素材が用いられている。
 - 多くの種類があり、味も豊かである。
 - 購入しやすい価格であり、地域を支えるものになっている。
 - 食べ慣れた味が多い。
 - 作り方にはいろいろとあり、また衛生面の状況も千差万別である。
- e. PYが、大量生産食料品に関連して挙げたのは、次のような事項である。
 - フランチャイズ制のファストフードチェーン店 (例) KFC、Burger King、フィリピンのJollibee、日本のモスバーガー
 - チェーン店のコーヒーショップ (例) Coffee Beans and Tea Leafs, Starbucks、ラオスのDao Coffee
 - 人気があり、世界的に拡大している。
 - 裕福なライフスタイルを連想させる。
 - 買うのが容易で便利である。
 - 品質が一定していて不良が少ない。
 - 人工的な味、色、質感
 - 油が多く、加工度が高い。
 - 健康に良くない。健康への長期的な影響
- f. PYは、自分たちがファストフード好きなことを認識した。一方で、大量生産食料品への懸念も持っている。大量の化学的・人工的な添加物や、ホルモン剤、農薬などが使われており、健康への影響が心配されるからである。

グループ・ディスカッションV:

ねらい

- ASEAN各国及び日本での食育の現状と課題を理解する。
- 伝統的な食文化の価値に気付く（ベトナムの料理を例として）。
- 健康的な生活に必要な要素と、阻害する要因を認識できるようになる。
- 食育を実践する。

活動

- 国別課題を小グループで共有し話し合う。
- ベトナムの訪問国活動中の郷土料理体験について共有する。
- 個人課題bを共有し話し合う。

成果

- PYは、それぞれが食べたベトナムでの郷土料理の共有を通して、ベトナム料理が健康的なものであることに気付いた。
- PYは、この分野で活動するASEAN及び日本の組織について学び、情報を共有した。政府機関としての例はブルネイの保健省で、同省は非伝染性疾患の予防及び対策プログラムを国レベルで実施している。企業の例としては、マレーシアでキャンペーンを行っているネスレが挙げられた。財団の例として、タイで減量と胴回り寸法の低減運動に取り組む健康推進財団について学んだ。シンガポールは、国レベルで減量キャンペーンを行っている。ラオスで行われている栄養補強事業では、妊婦ケア及び新生児のIQや運動機能などにおける長期的健康増進に重点が置かれている。
- PYは、食育の必要性や必要な内容は、国ごとに違うことを認識した。すでに活動している組織はあるものの十分ではなく、青年たちの貢献が待たれている。
- インタビュー体験の共有から、多くの成功例や関連する事例を学ぶことができた。ディスカッションを通して、それぞれの生活に健康的な食を取り入れることの必要性を認識し、やる気を高めることができた。

D. 決意・期待される今後の活動

ファシリテーターによるプロジェクトマネジメント講座を受けて、PYは実地体験としてまず意見交換し、船内で見られる食育関連の課題をリストにした。以下が、その例である。

- 水分摂取の不足
- 食べ過ぎ
- 食べ残し
- ホームステイ中の食事制限の難しさや制限違反
- 栄養情報の不足
- 船内での健康的な食事メニューの少なさ

- 不健康な食習慣：飲酒、スナック菓子やカップヌードルを食べること、深夜に食べること
- 不適切な運動や体を使う活動

実際の船内プロジェクトの構築に向けて、PYは状況分析と可能性分析を行った。その結果、食べ残しについてのプロジェクトをすることで一致した。プロジェクト実施のために、統括、ロジ、記録及び啓発促進の4つの委員会が作られた。

ファシリテーターの下船までの時点では、必要な調査がしっかりと行われ、第1次取りまとめの結果がDGの成果報告と合わせてほかのコースのPYも参加する全体会で発表された。同まとめによると、PYの60%が食べ残しをすることが分かり、特に女性PYにその傾向が見られた。食べ残しの理由で一番多かったのは、どれくらい食べられるかを考えずによそってしまうということだった。PYの多くは、食べ物をよそい過ぎる傾向があり、そのため食べ過ぎになる上、食べ残しもしている。よそった料理が、思っていた味と違った、というも食べ残しの理由として挙げられた。

この船上プロジェクトは、ファシリテーターの下船後も委員会によって継続された。プロジェクトの目的は以下のとおりである。

- 食育についてのPYの意識を向上させる。
- 食べ物や栄養に関する情報を提供する。
- DG内のPYに、チームワークの経験とプロジェクトマネジメントの実地体験をさせる

船上プロジェクトを実施する一方で、PYは国ごとに集まり、各国の状況分析を基に事後活動の案を話し合った。

- 日本参加青年は、地域住民を対象にした5日間の合宿企画を提案。地元の農業と食品保存及び健康的な生活スタイルについて情報提供をする企画。
- カンボジアPYは、農村部の子供たちの栄養状態改善を目的とした父母向け食育キャンペーンを提案。
- マレーシアPYの事後活動案は、栄養合宿（Nutri-camp）というもので、参加者に栄養に関する知識と生活での利用方法、そして適切な運動の仕方を教える。
- フィリピンPYは、地域の子供たちの栄養不良問題の解決に向けた活動案を立てた。父母への職業訓練や教育を通して世帯の貧困を解決することや、母子向け食事メニューを取り入れること、子供たちの体重を継続して調査することなどが含まれている。活動の実施に当たっては、地域、NGO、そして政府機関との連携が求められる。
- インドネシアPYは、「健康のための水耕栽培」プロジェクトを提案。家庭で野菜の水耕栽培や壁面利用

栽培を進めるもので、無農薬の野菜を家庭で自給することに重点を置いた。

- シンガポールPYは、就学児に適切な栄養を与えることを目的として、両親に弁当のメニューを教える活動を提案。
- ラオスPYとマレーシアPYは、農村部の小学生に健康に良い食べ物と手洗いについて教える活動を提案。栄養不良の問題と、食品を通して感染する病気の問題に対処することが目的。
- ベトナムPYは、農村部での人々の食事について調査することを目的に、船内で寄付集めをすることにした。調査結果を基に、人々に対して健康的な食に関する提案をしたいと考えている。
- タイPYは、オンラインのプラットフォーム立ち上げを提案。フェイスブックのファンページのような形を想定しており、広く一般に食育を進めるものである。
- ブルネイPYは、Freelaticsという団体と協力して健康的な食と運動を推進するという提案をした。

E. 評価・反省(自己評価セッション)

PYは1人1人の時間を取り、各自の設定した目標を基にして全体を振り返り、目標の達成度合いを確かめた。

英語のバリアを克服するという目標は、おおむね達成された。英語で会話やディスカッションに自信が付き、人前で英語での発表することにも慣れたという声が多い。

伝統的食文化の価値に気付くという目標も、ディスカッションや訪問国活動を通して、満足のいくレベルに達したようである。

関連する知識や実際的な健康関連のヒントを共有するという目標は、小グループでのディスカッションや「最も健康的な1日」の設計と発表、さらに課題別視察での講義や、ファシリテーターからの追加情報などを通して達成された。

健康的な食習慣に関しては、多くのPYが未達成であった。減量にも挑戦したPYのうち2人は、減量を達成し、さらに腰回り寸法を1~4インチ縮めることができた。一方、体重を増やしたいと思っていたPYは、ほとんど目標を達成できなかった。PYは、成功の秘訣として自己管理と仲間からの助けを挙げた。同時にPYからは、船上という環境が健康的な生活をする上ではあまり理想的でないというコメントも寄せられた。

地域社会への貢献の準備度という面の目標も達成された。PYは、国レベルでは小規模に、食育の面で貢献する決意を表明した。事後活動に関するアイデアは、前の節(D. 決意・期待される今後の活動)に報告したとおりである。

F. ファシリテーター所感

今回、再びこのディスカッション・グループのファシリテーターを務める機会をいただき、日本国内閣府、日本青年国際交流機構(IYEO)、タイ国事後活動組織、そのほかの関係機関に心より感謝する。

ディスカッション活動は、「東南アジア青年の船」事業の中核をなすものであり、今回私が気付いたのは、このディスカッションへのPYの参加を助ける形で、より良い時間配分がなされているということだった。また各寄港地での視察に関して、訪問がDG単位でない場合でも、DGに関連した訪問先が選定されていると感じた。

昨今、不適切な食習慣による健康問題が増加しており、それに対処するための出費も個人レベル、国レベル、世界レベルで大きな負担となって来ている。「東南アジア青年の船」事業で食育がディスカッションのテーマとして選ばれていることは大変時宜を得たものだし、このような機会を通して青年たちが適切な教育を受けて健康的な生活を送れるようになること、さらにほかの人々にもそれを伝えていけるようになることは、大変重要なことだと思う。

事業中、実際に健康的な食事をするという課題は、船内で提供される食事の内容や食事形態の制約から難しい面がある。私は、教育戦略や食べ物の入手と並んで、健康的な環境が食育の3本柱の一つだと考える。提供される料理に関して、可能な範囲で基礎的栄養情報を掲示すれば、PYが適切に食べるものを選び、船内でも健康的な食生活を体験できるようになるだろう。

伝統的な食について学ぶことにより、PYは事後活動の中で調理法や食文化についてのディスカッションを深めることができる。そこから、それぞれの国の伝統食への理解や評価が高まり、さらには様々な国の間に共通する食文化が有ることに気付くきっかけにもなるだろう。この点について東京でのファシリテーターミーティングで指摘して下さった管理部の方々へ感謝し、このような視点を持てることに尊敬の念を感じている。この分野での学びが、今後も続いていくことを願っている。

私からの提案をさせていただけるとすれば、事業に参加するすべての方々、特にナショナルリーダー(NL)の方々へディスカッションのすべてのセッションに積極的に加わるのが良いと思う。NLたちの参加やサポートが有れば、セッション内のアクティビティの重要性をPYが理解しやすくなり、またPYがどんな点で課題を抱えているかをNLたちが見つける助けにもなるだろう。

最後に、もう一度「東南アジア青年の船」事業への心からの感謝を述べさせていただく。ディスカッション活動の成功は、DGメンバーであるすべてのPY、そしてディスカッション活動運営委員の皆さんの努力の賜物である。本当にありがとうございます。今回の事業から立ち上がる事